やはりダンジョンに出会いを求める俺の青春ラブコメはまちがっているだろうか【まちガイル】

燻煙

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

迷宮都市オラリオ。冒険者集うダンジョンでは近日、様々な異変が発生していた。一介のぼっちギルド職員である比企谷八幡は新設されたダンジョン調査のためのギルド直属極秘暗部部隊ーーー【奉仕部】へ入隊し、強制労働という名の任務をこなすことになる。ダンジョンの異変に迫る冒険譚。

これは、少年が歩み、そしてその少年が（活動報告書に）記す、ー【社畜の物語】ー

俺ガイル×ダンまちのクロスオーバー、【まちガイル】です（勝手につくった）。かなりの見切り発車ですので事故は多いと思われます。タイトルがやりたかった

だけ感がいなめない。ダンまちの設定とズレるところが（ダンジョンの設定など）あると思いますが、創作ということでお許しを。処女作（童貞作）です。

目次

Prologue
プロローグ ―――― 1
比企谷八幡は腐っている。
比企谷八幡は腐っている。① ― 4
比企谷八幡は腐っている。② ― 13
比企谷八幡は腐っている。③ ― 18
比企谷八幡は腐っている。④ ― 35
比企谷八幡は腐っている。⑤ ― 45
比企谷八幡は腐っている。⑥ ― 56
比企谷八幡は腐っている。⑦ ― 85
比企谷八幡は腐っている。⑧ ― 109
由比ヶ浜結衣は困っている。
由比ヶ浜結衣は困っている。① 132
由比ヶ浜結衣は困っている。② 154

Prologue
プロローグ

迷宮都市オラリオ。『ダンジョン』と通称される壮大な地下迷宮が存在する巨大都市。圧倒的なイレギュラー性を持つこの『ダンジョン』で何が起こるかは神でさえも知らない。誇張ではない。実際、本当にわかっていないのだ。高次元存在である神にすら何が起こるかわからないその地上に空いた暗闇は、化物の口腔を彷彿とさせる。

しかし、それでも。その牙の中に夢を求めて飛び込んでいく者、すなわち『冒険者』は後を絶たない。そのイレギュラー性に怯えずに、敵を狩り、切り裂き、生活の糧とするために。そして一攫千金を掴むために。

だが残念なことに現実はそうそう甘くない。金を稼ぐには地下迷宮の奥深くへと進むことが前提となってくる。すると今度は力を手に入れなければならないが、『神の恩恵』を受け、敵を蹂躙し続け、そうして途方もない苦労を重ねた上に器の昇華、すなわちランクアップは起こる。現在のスコアホルダーは『剣姫』の1年だったか。しかしこれもまたイレギュラーだ。普通はこの倍以上かかる。それで上がるランクはたったの

1。それはそれで圧倒的な差が生まれるのだが、そうして苦労を重ねた上に待つのはまた力の差という壁だ。最下層に到達するには１０や２０の年月では到底足りないだろう。

そんな途方もない過程を生き急ぎ、命を落とす輩の何と多いことか。強さを求める余りその命を落とすのだ。『神の恩恵』を得ることで常人を遥かに超える力を持つ冒険者でさえも太刀打ちできない恐怖がそこには存在することを死亡者が出る度に実感させられる。だかそれでも欲望のために冒険者という職業は奥へ、奥へと進んでいかねばならない。死の危険性と欲望の狭間はまさに表裏一体。一歩間違えれば忽ちその命を落とす。地上に突如として現れた『ダンジョン』というイレギュラー性の中に身を置くことは圧倒的に分の悪い賭けであり、まさしくハイリスク・ローリターンと言わざるを得ない。……ろーりたーんって平仮名で書くといかがわしさが半端ない。平仮名で書く必要性全くねぇな。

ともかく、『冒険者は冒険してはいけない』という誰が考えたのかは知らないが的を射たこの金言の通り、いつ何時何が起こるか全くわからないダンジョンの奥へと進み、自らの命を危険に晒すことは阿呆のすることであり、冒険者なんて職業に憧れる輩が存在することそのものが異常であるとしか思えない。冒険者なんて、碌な物じゃないのだ。

結論。
冒険者なんて辞めちまえ。

比企谷八幡は腐っている。

比企谷八幡は腐っている。①

「……比企谷くん、これは何かな？」

俺の目の前でエイナさんが顔を顰める。

「そりゃ、君に押し付けたのは私だけどさぁ……」

エルフ特有の長耳と美しい容貌を持つ彼女はバベル職員でも指折りの人気職員だ。エルフとヒューマンのハーフ、ハーフエルフである彼女は純血のエルフ族たちとは違い、親しみやすいのも人気のポイントの一つである。

「いや何って、『ギルド職員の人員減少傾向を打開するためにオラリオへ呼びかける啓蒙書の作成』をしてきたつもりなんですけど……」

現在場所はギルド職員専用休憩室。２人分のコーヒーを用意して一つを我が上司の前に置く。最近買い替えられた新型コーヒーメーカーは使いやすくていい味が出ている気がする。

ありがと、と一言いってエイナさんがコーヒーに口をつける。エイナさんはブラック派だ。

「それ、眼の前でやられると胸焼けがしてくるよ……」

ブラックの苦味にその尊顔をさらに顰めてこちらを睥睨してくるエイナさんを尻目に、備え付けのミルクとサトウをだばだばと淹れる。ミルクもサトウもフリーサービスなんて、やはりバベル職員は最高だ。

「エイナさんこそ、カッコつけてブラック飲まなくてもいいんすよ？平塚先生に憧れてるのはわかりますけど。」

図星を突かれてギクッとした顔をするエイナさん。そういう反応が、モテるポイントなんだろう。あざといどこかの女とは違い、素でやっているのがわかる。

「やぁチュール、比企谷。調子はどうだ？」

とそこへ件の女性が現れる。突然現れたこの女性の名前は平塚静。ギルド職員統括主任。長い黒髪を無造作に垂らし常に白衣と白煙を纏うその姿は全ギルド職員の憧れである。ちなみに独身。

俺に目でコーヒーを催促すると彼女はどっかり、という擬音が聞こえてきそうな動作でソファに腰を下ろす。

「珍しいですね、先生がここに来るなんて。何かあったんですか？」

そうなのだ。ギルドのトップ、とまではいかないにしても、ギルドにおいてか

なりの地位を持つ彼女は、本来ならこんな末端の休憩室にはこない。

ちなみにさっきからエイナさんは顔を赤らめ口をパクパクさせている。恋なの？むしろ鯉？

「実は、比企谷に用があってな。チュール、そのレポートはなんだね？」

コーヒーを啜りながらエイナさんの手から羊皮紙をむしりとる。まぁエイナさんが動いてないから仕方ない。それよりも。

「俺にですか？」

「ああ。……それにしても、相変わらずお前は腐っているな。」

「他人の身体的特徴を揶揄するのはやめてください。で、こんな末端構成員の俺に先生直々に通達する用事ってのは何なんです？」

もしかしてクビ？働きたくはないが食いぶちが無くなるのは非常に困る。

「別に比企谷の目の話はしていないんだがな。レポートのことだ。これでギルド職員が増えると思ってるのか？」

「冒険者が減れば、その分増員は見込めるんじゃないすかね。」

あ、エイナさんが復活した。

「まさかギルド職員のイメージ向上ではなく冒険者に対するヘイトスピーチだとはな。呆れて物も言えないよ。」

俺と平塚先生との会話にどうやって入ろうか右往左往しているエイナさん。マジであざとさが見えねぇな。俺じゃなかったら惚れてる。

「御褒めに預かりましてどうも。で、先生の用事って何なんです？」

「チュール、比企谷はうまくやれているかね？」

おっと無視ですかそうですか。突然話を向けられてエイナさんが赤面してあたふたしている。かわいい。

「あ、えと、そうですね。冒険者に対する接客系は全然ですけど。レポート関連の事務仕事には適正があると思います。……多分。」

それでも素早く落ち着きを取り戻したエイナさんが言う。流石だなぁ。俺には無理だ。語尾に引っかかりを覚えるがきっと気のせいだろう。

「ふむ、そうか。ありがとう。」

満足気に頷いた先生がこちらを見る。お礼言われて頬に手を当ててるエイナさん、ちょっと平塚先生のこと好きすぎません？貰ってあげてほしい。

「比企谷、君はクビだ。」

……え。え？ちょ、え？

声にならない声がでる。嘘、マジでクビ？え、ホントに？

「なんだ口をパクパクさせて。恋か？むしろ鯉か？」

いや全然上手くねぇよ。なんでそんなドヤ顔なんすか。

「まぁ、心配するな。こちらの部署をクビになるというだけの話だよ。チュールに君を預けたのは私だが、予想通りの結果で何よりだ。」

自分の事を棚に上げているとそんなことを言われる。ん？なんだって？難聴系主人公ではないが、これはちょっと聞き返したい。

「えっ！平塚さん、それは一体どういうことですか??」

口を開きかけたところにエイナさんの不安げな声が入る。まぁ顎で使える便利な部下がいなくなるのだから当然といえば当然の反応だな。べ、別に嬉しくなんてないんだからねっ！

「そのままの意味だ。なぁに、この間の会議で決まった今度新設される部署にな。比企谷が適任だと思っただけだよ。別に二度と会えなくなるわけじゃないさ。そう心配するな。」

ニヤニヤとしながら俺とエイナさんを見比べる平塚先生。面倒くさい上司の

典型だな。だが生憎俺とエイナさんはそんな関係ではない。ほれみろ、エイナさんがちょっと嫌そうな顔してらっしゃる。そこそこ凹む。

「……自分の心配をするのが先じゃないですかねぇ」

せめてもの意趣返しとしてつぶやく。行き遅れめ。

「……ほう、いい度胸だな比企谷。久々にやられたいのか？」

「……イエ、ナンデモアリマセン。……で、その新設される部署って何なんです？」

平塚静に年齢と結婚の話はタブーである。具体的には殴られる。（超痛い）昔はよくやられたものだ。仁王を相手にする趣味はない。早々に話を戻すが吉だ。

「ぶっちゃけ俺今のポジション気に入ってるんですけど。コーヒーも飲み放題ですし。苦手な接客はエイナさんが全部引き受けてくれてるし。」

たいして働かなくてもなんとかなるし。割り当てられた仕事ご増えることなんてほとんどないし。部署移動で仕事が増えるとかになると最悪だ。

「まぁこればっかりはな。私が推薦したのもあるが、新設部署にはすぐにでも動いて貰わねばならん。諦めてくれ。別に、こちらの部署に友人はおろか恋人がいるわけでもないだろう？」

「ここの部署はおろかどこにもいませんよ。仕事が増えるのが嫌なだけなんです。新設部署とか絶対仕事多いじゃないですか。……で、これって強制命令になるんですか？」

ほんと仕事増量とかだけは勘弁してほしい。マジで。

「ここでもやはりぼっちなんだな。わかってはいたが。その通りだ。強制だから諦めてくれ。チュール、こいつの指導をしてくれて感謝する。これから新設部署に向かうぞ。比企谷、付いてきたまえ。」

わかってたんなら聞かないでほしいんですが。

コーヒーをぐいっと飲み干して平塚先生が立ち上がる。ほんと男らしいなこの人。はぁ、仕方がない。元々今の部署に入れてもらったのだって平塚先生のおかげなのだ。文句は言えない。めっちゃ言ってるけど。

「ではエイナさん、なんかそういうことらしいので。すいません、今までお世話になりました。」

俺も残ったコーヒーを飲み下して立ち上がる。

「えっ、あ、うん。お達者でね。」

平塚先生を見ていたエイナさんが話しかけられたことでこっちに向き直る。この人ほんと平塚先生のこと好きすぎません？もう付き合っちゃえよ……。

「あ！ちょ、ちょっと待って比企谷くん！」

休憩室を後にしようとした俺をエイナさんが引き止め赤くなった顔を近づけてくる。え？何でこの人顔赤いの？何何ちょっと近い近い近いいい匂い！

「……平塚さんと君って繋がりあるの？」

デスヨネー。はちまん知ってた。いやホントまじで。

「そのうち紹介するんで、今日のところはこれで」

エイナさんのいい匂いから逃れるべく適当にお茶を濁す。まぁ繋がりがあるのは確かだが、あまり声を大にして言うことでもない。

「そ、そう？いいの？よろしくお願いね？」

嬉しそうに破顔するエイナさんを置いて平塚先生の後を追う。もうホント、貰ってあげてください……。

エイナさんが誰とも付き合わないのってこれが原因なのか？そんなどうでもいいことを思いつつ、俺は休憩室を後にした。

比企谷八幡は腐っている。②

「話は終わったか？君も隅に置けないな。では、付いてきたまえ。」

「いやそういうんじゃないんで。一介の平と上司の関係なんで。」

ホント、マジで。あとついでに帰ってもいいすか？

休憩室を出て平塚先生の後についていく。カツカツとヒールを鳴らしながら廊下を歩く平塚せんはやはりギルド職員全員の羨望の的であるようだ。道行く職員が皆振り返る。これで何で結婚できないんですかねぇ……。

「最近、ダンジョン、ひいてはオラリオでイレギュラーがちらほら発生している。」

顔をこちらに向けることなく平塚先生はその瞳にある種の色を浮かべながら言う。

「特にダンジョン内でのイレギュラーが比較的多いようでな。」

確かに、この情報は俺も知っている。エイナさんの下で事務仕事をしている時から気になっていた。イレギュラーの数そのものは大したことはないものの、まとめると結構な量になるのだ。

「あるレポートによると、ここ近年の冒険者の死亡者数は急激に増えてきているようでな。このままでは冒険者の数は減っていくことになるだろう。」

「あるレポートねぇ……。」

そのレポートは恐らく以前俺がおまけで作成したものだろう。平塚先生もわかっているのか、こちらを向いてニヤリと笑う。俺のこと大好きかよこの人。

「そこで今回ギルドはこの問題を解消すべく手を打つことにした。」

……ん？なんだか雲行きが怪しくなってきた気がする。心持ち平塚先生が楽しそうだ。悪い予感しかしない。

エレベーターに乗り４０階へ。末端構成員の俺程度がこんな上階へ行っていいものだろうか。

５０階建のバベルは２０までが公共施設となっており、俺ちは勿論特別な権限などないので２０までしか行ったことがない。３０階では神様たちが【神会】を行い、最上階には美を司るフレイヤ神が住んでいる。つまりバベルの４０階ともなると、そこはもはや神域と呼んでも過言ではない。てか平塚先生も相当だな。この人マジに権力者か。

「幸い死亡者数の上昇傾向は冒険者側にはまだあまり知られていないため、気づかれる前に早期に動くことが必要とされたのだよ。」

未知の領域への進出と話の雲行きに対する俺の胸中など御構い無しに平塚先生が続ける。

「そこで、ギルドはこのイレギュラーに対して調査を行うことがこの間の会議で決まってな。」

は？調査？ギルドが？なんで？

エレベーターを降りて左へ曲がり、最奥にある黒塗りのシックな大扉を開けながら言う。

「それが今回新設されるギルド直属極秘暗部部隊、通称【奉仕部】の仕事だ。」

バァーン!!という効果音が聞こえてきそうなテンションで平塚先生が言い放つ。この人好きそうだもんな、極秘だとか暗部だとか。なにＮＡＲＵＴＯ？サスケェ！バベルに復讐しなければ。

「ま、端的に言うとだな、比企谷。」

必死に脳内で現実逃避をする。ついでにこの場からも逃避したい。俺の脳内選択肢が、逃亡することを全力で推進してくる。ショコラちゃん……。

「上司命令だ。ダンジョンに潜れ。」

平穏の崩れさる音がした。

比企谷八幡は腐っている。③

拝啓、愛しのラブリーマイシスター小町様。桜花の候、貴方様はますますお元気でお過ごしのことと存じます。新春を迎え、一際美しくなる貴方様にとっては、私のような愚兄の時事などは取るに足りぬ些事でございましょうが、日頃お世話になっております貴方様へ御報告申し上げ奉ります。お兄ちゃんはダンジョンに潜って死ぬこととなりました。ひいてはお兄ちゃんの部屋の箪笥の底に保管してある数冊の本は決して中身を見ずに処分していただきたい。先立つ不幸をお許しください。お兄ちゃんはダメです。お兄ちゃんの将来が息しておりません。さようなら。いつかまた会えたなら、その時はまたお兄ちゃん、とその愛らしい声で呼んで下さい。では御達者で……。敬具。

「平塚先生、入る時はノックをしてください。」

「ん？まぁいいだろう雪ノ下。そんな堅いことを言うな。」

日常の崩壊していく音をＢＧＭにうっかり小町に宛てた遺書を書いていると、部屋の奥からよく通る、澄んだ声が聞こえてきた。

平塚先生に追随するように部屋の中へと一歩を踏み出して中を見渡してみる。

落ち着いた雰囲気の椅子や長机、会議用ホワイトボード、少し高級感のあるティーセットなど数少ない調度品の中、その声の主はある種の存在感を纏って座っていた。

流麗な黒髪は漆のようであり夜空のようでもあり、艶やかさと煌めきを放ち。

雪のように白い肌は生き物としての熱を持っているのだろうかと不安になってしまうほどであり。

真夜中の海を想わせるように深く、それでいて透き通った双眸には、研ぎ澄まされた剣尖のように鋭い意志が秘められており。

その下に存在する小さく整った筋の通った美しい鼻、白い肌の中でその存在を健気に

主張する唇はポンパドゥール・ピンク。

銀の軽量なプレートアーマーに包まれた四肢は細く、触れてしまえば掻き消えてしまいそうに儚く。

おおよそ美しさという概念を収斂したかのような少女が、そこにはいた。

華、そんなようなものが彼女にはあった。いや、彼女そのものが『華』なのか。

（エイナさんも綺麗だが、綺麗さの勝負じゃ部が悪いといったところか。）

止まった思考の中で比企谷八幡はそんなことを考えていた。

でも。

（ま、俺には関係ないな。どうこうなれるはずもないし。）

こんな美少女とお近づきになれるだなんてそれこそ神の悪戯か何かだろう。そんなものは御免被る。たまったもんじゃない。それに、大体綺麗な花には棘があるものなのだ。完全に偏見ではあるが。ソースは平塚先生。棘っていうより熱と拳ですね。

いやでもエイナさんは普通にいい人だな。俺をちょっと顎で使う感はあるが全然許せる。あれ？かなりの優良物件では？

「紹介しよう。ここにいる腐った目と根性を持ったこの男は比企谷八幡。私が推薦した奉仕部のメンバーだ。」

平塚先生の後ろでぼへーっとしている間に俺の紹介が終わる。腐り具合について否定できないのが辛いところだ。

「比企谷、こっちは冒険者の雪ノ下雪乃。お前の上司にあたる。粗相のないようにな。」

うす、と軽く礼をするとあちらの紹介が行われる。ほうほう俺の上司とな？てか冒険者なの？冒険者をこんなバベルの上階に入れていいわけ？まぁ末端の俺も人のことは言えないが。で、結局何するの？何もしないことなら得意なんですけど。

雪ノ下雪乃と呼ばれたその少女は俺にその双眸を一瞬向けたと思いきや、すぐに平塚先生へと戻す。

「彼が、ですか？とても役に立ちそうには思えませんが。」

明らかな不快感が見てとれる反応どうもありがとうございます！ちょっと反応が正直すぎないこの娘？役に立つ自信もつもりもそんなにないから間違ってはいないんだが。

「まぁそう言うな雪ノ下。こいつはこう見えて中々やる男だぞ？目と根性は腐っているがな。」

「……先程からその中々やる男が自慢の腐った瞳で私に淫猥な視線を送ってきているのですが。非常に不快です。」

いや淫猥て。罵倒されたことよりもそのチョイスにびっくりだわ。てか別にそんなじろじろ見てないでしょ。見てないよね？嘘ですめっちゃ見て感想言ってましたすい

ません。

「悪いが、私はこれから諸用ですこし席を外す。雪ノ下、比企谷に説明を頼む。」

そう言って去ろうとする平塚先生。いやいやちょっとちょっと。このナイフみたいな女と2人きり？我々の業界でも御褒美じゃねぇよこんなの。つーか、

「いやいや待って下さいよ先生。ちょっと俺今迷子なんですけど。状況がさっぱりわからないんですけど。とりあえず一旦帰っていいですか？」

ここは決死の覚悟で逃亡だ。こんな厄介な事からは逃げるに限る。

「……先生？」

俺が平塚先生を『先生』と呼ぶのに違和感を覚えたのか雪ノ下が呟くがそんなことはどうでもいい。今は逃げることだけを考えるのだ。頼むぞ平塚先生！君だけが頼りだ！捨てられた子犬の瞳で平塚先生を見つめる。クゥーン。

「……まったく比企谷、お前という奴は。今回の件でそれが少しは改善されるといい

んだがな。おっと時間だ。雪ノ下、この男に今回の趣旨・任務を説明してやってくれ。ではな。」

や、ちょ、ええ?そんなアッサリ?子犬は?

俺の決死の抵抗を素気無く袖にし、背中を向け手を振り去っていく平塚先生。靡く白衣が最高にクールでイカしてる（昭和感）

ヤンキーみたいだから子犬で堕ちると思ったのに……。

「……」

平塚先生が去り、閑散とした部屋に静けさが戻る。遺憾ではあるがとりあえず説明を受けるかと思い、雪ノ下からなるべく遠く、それでいて会話が成立するくらいの距離の椅子を選んで座る。

ともかく説明を受けないことには状況が

パリワカである（さっぱりわからないの略）。覚悟を決めろ比企谷八幡！

向かいの少女の圧に負けないようにフシューッとした視線を向ける。フシューッ！

「……とりあえず、その下卑た視線をやめてもらえるかしら。気分も気持ちも悪いわ。」

小町よ、お兄ちゃんのメンタルはもう0だわ。え、てか気持ち悪いって何？俺の目のこと？そりゃそうか。

うっかりすいませんでしたと言いそうになるのを堪えつつ睨むのをやめる。べ、別に負けたわけじゃないんだからねっ！

「先生から頼まれたのだし、遺憾ではあるけど、とりあえず説明に入りましょうか。」

遺憾なのかよ。気が合うな、マイナス方向に。

平塚先生からの依頼のために渋々、といった調子で雪ノ下は話を続ける。

「多少は平塚先生から聞いているとは思うのだけれど。私たちの任務はこの度新設されることになったバベル直属極秘暗部、通称【奉仕部】として冒険者に扮し、ダンジョン内外のイレギュラーに秘密裏に対応・調査することよ。」

ーーーダンジョン。

その忌まわしい単語は聞くだけで嫌になるが、奉仕部の活動は概ね予想通りだ。最悪

すぎる仕事内容だが。

俺の反応を見て問題ないと悟ったのか雪ノ下が続ける。

「ただし、極秘暗部というくらいですからそんな単純なものではないわ。重要なのは『秘密裏に』調査することよ。冒険者や街の人々に悟られてはいけないの。」

「……つまり一介の冒険者に扮して冒険者としてダンジョンを進み生活し、それでいてダンジョン内でのイレギュラーや状態を肉眼で見て確認してこなきゃならないわけか。」

これはもしかしたらどころか予想以上に最悪な仕事かもしれない。まずダンジョンというだけで俺の評価はダダ下がりなのだが。

「あら、会話が成立するのね。驚いたわ。」

「いやさっき普通に平塚先生と会話してたよね？なんでそんな驚いてるの？」

いちいち罵声を交えないと会話が成立しないのか雪ノ下。こっちがびっくりだ。

「ごめんなさいね。さっきのは私の概念では普通とは呼ばないの。」

気を取り直して、といった体で雪ノ下が話を戻す。

「さらに重要なのは【奉仕部】という名前よ。私たちは冒険者やその他の人々が平穏無事に過ごすため、彼らに、社会に奉仕をしなければならないわ。モンスターを上手く狩れない者にヴァリスを施すのではなくその技術を教えること。持つ者が持たざる者に慈悲の心を持って与えること。人はそれをボランティアと呼ぶわ。困っている人に救いの手を差し伸べることもまた、【奉仕部】の活動となるの。」

「つーことはつまり冒険者として振舞うと同時に万屋みたいな物でもあるわけか。そして主目的がダンジョン内外のイレギュラー調査と。」

うへぇ、ちょっと仕事が多すぎない？マルチタスクとかそんな意識高い発想俺にはないんですけど。エイナさんのところが早くも恋しい。

「そういうことよ。脳の方はまだ腐っていないようね。ところで……あなたに聞きたいことがあるのだけれど。」

自分で言っててげんなりとする俺なんぞ視界に入っていないと言わんばかりのマイペースっぷりを発揮しつつ雪ノ下が続ける。今後も腐る予定はねぇよ。

「何だ？」
「あなた、さっき平塚先生のことを『先生』と呼んでいたと思うのだけれど。一体どういう関係なのかしら？」
「別に大した関係じゃない。昔色々教えてもらったことがあるってだけだ。その名残でな。」
　なんだそんなことか、と内心ホッとする。今までに食べたパンの枚数とか聞いてくるかと思ったわ。
「お前も先生って呼んでるってことは、そうなのか？」
「……ええ。あなたと同じ、とは言いたくないのだけれど、似たような物だと思うわ。昔色々と教えてもらったのよ。」
　そう言って少しだけ懐かしむような眼をする雪ノ下の瞳の奥には、懐かしさや寂しさといった感情以外の感情が含まれているように感じられる。
　何か昔にあったのか？とも思うが、プライベートな事だしな。聞かないほうがいいだろう。

「ちょうど終わったようだな」

会話が途切れ、再び2人を包んだ静寂が長く続くことはなく、突如現れた平塚先生の声によって破られる。

え？いつからいたの？扉の開く音は聞こえなかったと思うんだが。公議隠密か何かなの？

「先生、ですからノックをお願いします。」

「まぁいいじゃないか。君たちしかおらんのだし。」

そう言って平塚先生は愉快そうに笑うと俺と雪ノ下の間にある椅子に腰掛け話始める。

「さて比企谷、今回の極秘ミッションの大筋はわかったな？」

「まぁだいたい。でもちょっといいですか？」

「何だね？」

「2人だけですか？」

「今のところ増員の予定はないな。不安か？」
「流石に２人でダンジョンに潜るのは危険でしょう。低階層ならともかく。」
「私はこの男と２人という状況に耐えられるか不安なのですが。身の危険を感じます。」
そこ主張いりますか雪ノ下さん。
心配しなくても誰も襲わねえよ。
「まぁ私もそんな無謀なことをしろとは言ってないさ。秘密さえばれなければいいのだ。君たちは一般の冒険者として生活する上で、他派閥とチームを組むなり傭兵を雇うなりしてくれ。」
「わかりました。ではもう一つ。
……この仕事、何時まで続くんですか？給料とか出るんですか？」
ここが一番肝要なところだ。ダンジョンなんてやってられっか！俺は働かないぞ！
「無論、全ての謎が解けるまで、だな。君の給料の方は安心しろ。妹さんに届く手筈になっている。出所不明のヴァリスが定期的に手に入っている冒険者というのも不自然だろう？」

「いやそれ全然安心じゃないんですけど。え、じゃあ俺の生活ってどうなるんですか？」

給料問題は死活問題だ。手元に一切入ってこないとなると人生詰みだ。今までの給料は確かに小町が管理してたが、Ｉｎｃｏｍｅ／ｚｅｒｏとなると話は変わってくる。

「何を狼狽えることがある？君は今日から冒険者だ。自分の食いぶちは自分で稼げ。」

ピシャーンッ！と俺の後ろで雷が鳴る。おいおいマジか。ダンジョン生活が始まってのたれ死ぬのか。死んじゃうのかよ。

「任務はすぐにでも開始してほしいが、その前に君たちはチームでありライバルだ。切磋琢磨して成長していってほしい。とりあえずは連携の確認がてら、気楽に上層に潜ってくるのがいいんじゃないか？期待しているぞ。」

気楽に、ねぇ。その言葉に若干の不満を抱きつつも渋々うなづく。連携は確かに大事だ。連携一つで生死がわかれることなんてダンジョンではザラにある。

つーかダンジョンに潜ることをアッサリ肯定してしまいそうになる自分がいる。落

ち着け八幡！ダンジョンなんてクソだぞ！冒険者なんて職業としては最底辺だろう！騙されるな！

あれ、これよくよく考えたら給料安定平穏無事の公務員から一気に最底辺に没落してるんじゃ……。ギルドにいれば安全だと思ったのに！よくも騙したァァァァ!!

「確かにそうですね。では早速、ダンジョンに潜ってくることにします。そこのひき……ひき……ヒキガエル君？ダンジョンに向かうわよ。」

「なんでお前俺のガキの頃のあだ名知ってんの？人のトラウマほじくり返すのやめてくれない？比企谷だ比企谷。」

このあだ名のせいで友達が一切できなかったんだからな！人の目をキモいだのなんだのと……。あだ名全然関係なかった。

「ってちょっと待て雪ノ下。いきなりダンジョンとかは無理がある。」

そんな喫茶店感覚でダンジョンなんか潜れるか。

「？何を言ってるの？１～２階層で連携を確認するだけの簡単な作業でしょう？」

雪ノ下が怪訝な顔をして問い返してくる。首をちょっとコテンと倒す仕草がちょっと可愛いとか思ってしまった。

「まさか……ルーキー？極秘任務に抜擢されるのだからそれなりの実力があるものと推測していたのだけれど…。」

雪ノ下がそう言って平塚先生と俺に抗議の視線を送る。

まぁそうなるわな。気持ちはわからんでもない。

だがちょっと違う。

「あー雪ノ下、こいつはな。冒険者じゃなくてギルド職員なんだよ。」

平塚先生の言葉に目を見開く雪ノ下の顔は、人間であることを再確認させてくれるほど、親近感の湧く驚き方だった。

比企谷八幡は腐っている。④

「あー雪ノ下、こいつはな。冒険者じゃなくてギルド職員なんだよ。」

平塚先生の声に驚いたように瞳を開く雪ノ下。ちょっとしてやったり感を感じる。別に何もしてねぇけど。

「……どういうことか、説明してくれるかしら。」

先ほどの驚嘆などなかったかのように、すぐに冷静さを取り戻した雪ノ下が尋ねる。

「どうっていわれてもな。」

そのままの意味なんだが。まぁノーマルな職員とは決して言えないとは思う。

そう言って平塚先生を横目で見やる。

何分この事情は色々と面倒くさいのだ。ぶっちゃけ俺もよくわからんことがあったりする。

説明するかどうか迷っていると平塚先生が口角を上げながら

「比企谷、話すかどうかは君に任せるよ。雪ノ下は信用に足る人物だ。まぁ今後活動を共にすることを考慮しても、話をしておくのがベターだとは思うがね。」

と助け舟を出してくれる。この話をする上では平塚先生も関係があるので許可を出してくれたと言うべきかもしれないが。

「……そうですね、ならかいつまんで話しますよ。」

全部は話をしない。つーか俺の過去編とか需要ないし。とっとと話を進めよう。ただどう話をしたものだろうか、普段全く会話をしなかったツケがここで回ってきたようだ。

よし、雪ノ下が少しイライラしてきたように思えるので今はサラッと流しておこう。

「あーとりあえずだな、雪ノ下。潜りたくはないが、ダンジョンには昔少しだけ入ったことがある。俺は確かに冒険者ではないが、ダンジョンに潜ってもそう簡単には死なんはずだ。一応、《神の恩恵（ファルナ）》もあるし。ただ、防具とか武器とかその辺の道具を殆ど売っちまってな。ヒノキの棒とお鍋の蓋くらいしかないんだわ。そういうわけで、すぐにはダンジョンに行くってのは無理だ。装備くらい整える時間をくれ。」

何を隠そう俺こと比企谷八幡は昔ダンジョンに潜っていたことがある。

ただしそれはもう昔の話。あんなところに潜るのなんて、今は本当に御免なのだ。俺は一介のぼっちギルド職員になったのだ。

ただ、今回は平塚先生直々のミッションであるし、ダンジョンに潜らねば収入がなくなりＢＡＤ　ＥＮＤ一直線なのだ。平塚先生には恩がある上、小町を不安にさせるようなことはできない。絶対に。俺なんかの収入がなくても今の小町なら余裕で生きてい

けるとは思うが、路頭に迷った情けないごみぃちゃんにだけはなりたくないし。はぁ……。

怪訝そうな顔をしながらも雪ノ下はわかった、とだけ返事をする。詮索されないのはありがたい。俺に対して無関心なだけかもしれないが。よし、帰ろう。

「つーわけで今日のところは解散だ。じゃぁな。」

片手を背中越しに振り振り、部屋を後にしようとする。

「待ちなさい比企谷君。次回の予定も決めず帰るつもり?」

ぎくゥッ!と背筋が伸びる。ちっ、鋭いやつめ。このまま帰ってこないつもりだったのに。

「大方、このまま帰ってこないつもりだったのでしょうけど。まあいいわ、比企谷君。防具と武器を買いに行くわよ。」

アッサリと目論みを見破られた俺に雪ノ下が提案してくる。雪ノ下のみやぶる!正

体がバレた！

「いや買いにいくって、ほら俺あれだから。それがこれでこうだし。ね？」

「全く情報が伝わってこないのだけれど……。防具がないなら、すぐにでも装備を整えてダンジョンに潜りましょう。貴方の実力を見ておきたいから。」

いやなんでこいつそんなダンジョンに潜りたがるの？前世がモグラだったの？唄でも歌ってろ。

「いやいや、ほら、今俺手持ちのヴァリスがないし。大した物買えないだろうし。」

甘いな雪ノ下。ここで必殺、「金がない」発動だ。これを使ってしまえば今日は解散せざるを得なくなる。おまけにカードを2枚山札からドローできる。山札ってなんだよできねぇよ。

「心配するな比企谷。これはバベル直々のミッションだからな。これで好きに買ってこ

い。ただし、用途のわからない出費があると倍額で返済して貰うからな。」

平塚先生により容易く俺の必殺技が破られ俺の手元にヴァリスの入った袋が投げられる。結構重い。そこそこ入ってそうだ。

「君の場合、そんなにお金はかからんだろうがな。とりあえず5万ヴァリスだ。就任祝いだと思っておいてくれ。雪ノ下もだ。ほれ。」

と言って雪ノ下にも同様にヴァリスの入った袋を渡す。

くっ、施しではなくて就任祝いときたか。これでは断れない。流石は平塚先生、俺の技を見抜いている。

「金がない」を発動した以上、「金がある」状態になってしまったが最後だ。買いに行かざるを得ない。

渋面をつくって雪ノ下を見ると手早く自分の荷物を持ち防具屋に行く準備を整えている。

「これで問題はないわね。では平塚先生、行ってきます。」

「ああ、諸君。それではミッションスタートだ!」

どこぞのＬｉｔｔｌｅなＢｕｓｔｅｒｓのリーダーのように高らかに宣言する平塚先生。あんた守備範囲広いな。

「君たちに不都合がないよう、こちらでも色々手を回しておくが、もし何かあったら遠慮なく言いたまえ。任務放棄以外は取り扱ってやろう。」

遠慮なくの下りで反応した俺に牽制するように言う。くそっ、逃げ場がない。

「活動時間は君たちで好きに決めてくれて構わないが、基本的には毎日になるだろうな。活動拠点としてはここを使ってもらって結構だ。ダンジョンのイレギュラーを調査すると共に、奉仕部としてもしっかり活動してくれたまえよ？」

フレックスタイム制を導入しているのかと思いきや、単なるブラックだった。酷すぎる。

「あの、ちょっとだけいいすか？」

「ん、なんだね比企谷。」

「奉仕部としての方の活動って、ちょっとあやふやなんですけど。具体的なイメージが湧かないというか。」

そうなのだ。ダンジョンのイレギュラーというのも正直な話具体的によくわかっていないが適当に報告してもまぁ大丈夫だろう。

ただ問題は後者の方である。奉仕部としての活動となるとどうやって誤魔化そうかわからない上に仕事が上乗せされる時に「奉仕部としての活動」という免罪符を与えてしまうことになる。働くことに積極的かと思った？残念！真逆でした！

雪ノ下がこちらの真意を読み取ったのか蔑むような目を向けてくる。俺の思惑はスケスケらしい。スケスケだぜ！本人も若干跡部様っぽい。

「そういうことか。それについても問題はない。手は既に打ってあるよ。奉仕部としての活動は様々な物があるだろうが、とりあえず今日のところは奉仕部の活動は考えなくて大丈夫だ。」

なるほどわからん。が、今後厄介なことになりそうだということだけはわかった。

「わかりました。では此処にはどのくらいの頻度で戻ってこればよろしいでしょうか？」

おお、雪ノ下。あれでわかっちゃったのか、流石だな。背中とかすすけて見えてるのかもしれない。

「そうだな、基本的には奉仕部の拠点だからな。奉仕部に対しての依頼が舞い込む可能性もあるし、常駐してもらうのが良いだろうな。ただ別に２４時間体制というわけではない。一般のギルド職員と同じように、定時で帰ってくれても構わんよ。」

平塚先生の言葉に安堵する。２４時間とか流石に終わってる。が、ホームに帰ることができるならモーマンタイだな。テリアモンの時は可愛いんだけどなぁ……。セントガルゴモンも嫌いではないが。

「さて、以上かな？では、改めて、ミッションスタートだ！」

かくして、俺のギルド直属の極秘ミッションがスタートしたのだった。はぁ、帰りたい。

比企谷八幡は腐っている。⑤

諸用があるとかなんとかで、平塚先生は去っていったので雪ノ下と2人でエレベーターに乗り、バベル内の装備屋へと向かう。こんな個室に2人っきりだと思うとちょっとだけドキドキしてしまう。もちろん、殺されるんじゃないか的な意味で。

「……。」

2人とも無言だが別に気まずいとは思わない。無駄口を叩くような奴でないことは恐らく両者共にわかっているし、会話のネタもないためだ。言うまでもないことだが、俺から他人に話しかけるなんて不可能だしな。

そろそろ目的の階に到着するというタイミングで、唐突に雪ノ下が帽子を被りだす。ベージュのサイズ大きめのつば付き帽子を目深に被った雪ノ下は、銀の胸当てとミスマッチすぎてとても偏屈な格好となっている。素材がいい為か、偏屈というよりはファッショナブルなイメージ。何着ても似合う奴っているんだな。

「……。」

何だろう、前衛的ですねとか言ったほうがいいのかしらん？殺されそうだから絶対言わないが。

「……あなたも何か変装したほうがいいわ。治療用の包帯ならあげられるけれど。」

「え、それ変装なの？てかなんで？」

包帯で変装って何だよ。透明人間と間違われるだろうが。

「ギルド職員が急に装備一式を買い求めるなんて、明らかに不自然でしょう？顔くらい隠した方がいいわ。」

やれやれだぜ、といった体で雪ノ下がそう言い、自分の荷物から包帯を取り出そうとする。

「いや大丈夫だから、特に包帯とかいらないから。」

「でもバレると今後困ることになるわ。何か他に策があるのかしら？」

策、ね。まぁあるにはあるんだが、言うかどうか迷いどころだな。

「あー、策、というか、な。まぁとにかく大丈夫だ。禁則事項だから言わんが。それにぶっちゃけ俺は接客系が苦手だから、ギルドではほとんど裏方の事務しかしてない。顔バレなんてすることなんてないだろ。」

禁則事項ですっ♡ととりあえずはお茶を濁しておくことにする。いずれ説明することになるだろうが、説明しないでも大丈夫なら説明しないほうがいいに決まってる。むやみやたらにステイタスは見せる物でもないし。

「……そう。なら、いいわ。」

ステイタスに関することだと感づいたのか、雪ノ下がそれ以上追求してくることはなく、会話が終わる。こいつ空気読めるんだな。読む空気と読まない空気を分けているだ

ろうが。流石にステイタスを明かすよう要求してくることはないか。

チーンという甲高い音と共にエレベーターの扉が開く。

雪ノ下から遅れて5歩ほどの距離を空け、先ほど言葉を濁した策とやらを実行しておくに。

エレベーターが閉まるギリギリで出て雪ノ下についていく。

昼過ぎという時間帯のためかはわからないが、装備屋近辺はあまり人がいなかった。

雪ノ下と視線で合図し、とりあえず1番空いていそうな装備屋へ。まずは防具だ。雪ノ下も何か買うのかは知らんが、真っ先に掘り出し物のセールコーナーを目指す。そこそこいい物があるといいのだが。

手当たり次第に持ったりして吟味してみる。……なんだこの《兎鎧（ビョンキチ）》って。

ネーミングセンスは皆無だがそこそこ軽く中々な装備だと思う。名前が気に食わんから止めとくが。

5万ヴァリスもあるのだ。もうちょっと値を張るものでもいいか、と思い吟味を再開

する。お、この胸当ては中々だな。だがこちらの軽量鎧も捨てがたいな……。うーむ、八幡こまっちんぐ。早く帰って小町に会いたい……。

結局、胸当てを主体に腕、脚用の防具を買い店を出る。1万近く使ってしまったが、まぁいいだろう。多少無理をしても防具は良いものを選ぶべきだ。

店を出ると隣の店から雪ノ下が出てくるのが見えた。隣の店にいたのか。どうりで店の中で見かけないわけだ。

雪ノ下と合流しようかと思い、止めておこうと考え直す。いくら顔バレしないといっても、雪ノ下みたいな、失礼だが変な格好の奴と歩くと流石に目立つ。

そう思い直し、雪ノ下がこちらを向くタイミングくらいで雪ノ下とは逆方向の店に入る。

次は武器だが、どうしたものかな。

「ま、とりあえず掘り出し物コーナーだな。」

背中に視線を感じながらそう呟いて掘り出し物コーナーへ。

昔は結構色々な武器に手を出していたが、やはりここは短剣か刺突剣、片手剣あたりかな。

昔使っていた武器や防具はそのほとんどを売ってしまっている。雪ノ下にはヒノキの棒とお鍋の蓋と言ったが、誇張ではない。部屋にあるのは精々が護身用の短剣くらいだ。

（ま、その護身用短剣でも別にいいんだがな。）

と、不意に昔を懐かしんでいる自分に気づいてしまい、心の中で悪態をつく。

（何を考えてるんだかな、全く。）

自己嫌悪と共にイライラが襲ってきた。俺はダンジョンが嫌いだ。冒険者なんて職業なんざ底辺だ。

頭の中でそう唱えつつ、もうこれでいいか、別に何でもいいし。と近くにあった細身の片刃の片手剣、カタナを手にとり抜いてみる。

ヘンテコな装飾が入ってはいるが、悪くない。軽く、鋭く。刺す、斬る用の片刃の剣。

（ただ……）

持ってみてから気づいたが、掬がピンクにコーティングされており、鞘もなんだかデコデコしている。正直言って目が痛い。ギャルギャルしたオーラが溢れており、そこそこいい物品なのに売れていない理由が明確にわかる。こりゃ誰も買わんわ……。良い品なのに、勿体無い。

（さっきのピョンキチと良い勝負かもな。）

どっちを買うかと言われれば無論ピョンキチなのだが。

ライトセイバーばりに光る刀を元あった場所に置こうとした時、ふと気づく。

違和感、違和感だ。

（……この視線、雪ノ下のものじゃないな。誰だ？）

店に入る前に感じた視線は近くにあり、さらに距離を詰めてきている。バレることを恐れていた雪ノ下がこちらに近づいてくるとは到底考えられない。

何者かはわからないが、こういう時は動揺を表に出さないのが定石だ。バレているわけがない。ビー・クールだ比企谷八幡。

堂々とした態度で再度手に持っていたデコ刀を置こうとしたその瞬間、

「……ヒッキー、なの？」

視線の主が、俺の後ろで可愛らしい声をあげ、すぐそばまで近づいてくる。

ヒッキー？何それ新種のモンスターか何か？

「やっぱりヒッキーだ！なんでこんなところにヒッキーが？」

頭をクエスチョンマークで埋めながらも、とりあえず声の主の方へ顔を向ける。で、ヒッキーって何？ゼツボーグの親戚か何か？

俺のすぐ後ろで声をあげていたのは雪ノ下より少し小柄だろうかというくらいの身長、そしてそれに反比例するかのように豊かな胸部をもった少女だった。

緩くウェーブのかかった肩までの明るい茶髪に大きくくりくりとした人懐こい目。

明るい色の、まさに『イマドキ！』な服装の上に、スポーツブラのような白い胸当てを着けている。

健康的ビッチ系美少女といった体の彼女の大きな瞳は、間違いなく俺を捉えていた。

（……誰こいつ？）

意外ッ！それは初対面！

そう、完全に初対面のはずだ。

こんなギャルギャルした知り合いは記憶にない。むしろ知り合いがいないまである。

人違いじゃないすかね？と切り出そうとしたその時、俺の耳に絶対にありえないはずの言葉が飛び込んでくる。

それは、絶対にありえない言葉。

「……ヒッキー、ギルド辞めて冒険者になるの？」

ああ。

（……嘘だろ？）

これは、紛れもないイレギュラー。

（こんなことなら、包帯巻いとくんだったか。）

バレる筈が、なかったのに。

俺の《魔法》が破られた。

比企谷八幡は腐っている。⑥

俺の《魔法》が破られた。

それも完全に初対面の、ゆるふわビッチ系リア充に。

前回のラブライブ！と言わんばかりに頭の中にモノローグが流れる。もしくはオーズ。またライブチケット取れなかったんだよなぁ……。売り切れちょっと早すぎるって、八幡思うな！

雪ノ下相手にあれだけカッコつけて言い放ったくせに、このザマである。恥ずかしいことこの上ない。

俺の《魔法》が破られたという事実から目を背けようと必死に回転させていた頭を止

め、現実と向き合う。

この女は一体誰だ？まずはそこからだ。

「……あー、すまん。その、ヒッキーってもしかして、俺のことか？」

とりあえずモンスター名のようなあだ名について尋ねる。頼む、俺じゃない誰かであってくれ。

「うん！いいでしょ？」

いや良くはねぇよ？

俺の祈り虚しく目の前の彼女が肯定する。神は死んだ！てか下界に溢れてましたね。目が腐っているのがモンスターっぽいからかしら？昔どころか今もこのネタでいじめられちゃうの？泣いていい？

まぁ人からどう呼ばれようがどうだっていい。問題は、何故こいつが俺に話しかけてきているか、だ。

……どうでもいいが、ヒッキーってちょっとないんじゃないの？引きこもりみたいに聞こえるじゃねえか。大体合ってるから余計傷つく。別に、どうでもいいが。

「あーそっか、まだ名前言ってなかったよね。あたしは由比ヶ浜結衣って言います。見えないかもだけど、【ヘファイストス・ファミリア】の鍛冶師やってるんだ！」

無言になった俺にそわそわしていた彼女、由比ヶ浜結衣が名前を告げる。うん、やっぱり初対面だな。直接会ったことは一回もない。

それにしても【ヘファイストス・ファミリア】ときたか。

【ヘファイストス・ファミリア】は鍛冶を司る主神・ヘファイトスの運営する鍛冶ファミリアだ。その構成員のほとんどが高ランクの鍛冶師であり、ヘファイストス・ファミリアによって作られた武器や防具は優秀であることで有名で、冒険者にとってはまさに喉から手が出るほど欲しい代物だ。

また、ファミリアの構成員の大半がただの鍛冶師ではなく、《戦う鍛冶師》であり、戦闘力も兼ね備えている。

潤沢な資金と戦力を兼ね備えた【ヘファイストス・ファミリア】はオラリオでも特に

有名なファミリアの一つである。

かの【ヘファイストス・ファミリア】ということで少し驚く俺をちらちら見やり、あうあうしている由比ヶ浜。オットセイか何かかこいつ。

「あの、えと、実はエイナさんからヒッキーが部署移動になったって聞いて、それでその、ちょっとショックだったていうか、かなりショックだったっていうか……。

でもでもここでヒッキーみたいな人見かけて、追いかけみたらホントにヒッキーで！それにその、あたしの作った《デコポン》見てるし、もしかしたらもしかするかもって思って！

あ、いや、もしかするってゆーかなんとゆーか……。あたし何言ってんだろ～!?」

顔を赤くして早口に捲し立てる由比ヶ浜。めっちゃ挙動不審だなこいつ。大概俺も挙動不審なので人のこと言えませんでした。

あたふたとオットセイしている由比ヶ浜の言葉の中で幾つか気になる単語が出てき

たが、それはさて置き。

（エイナさん、あなたの仕業ですか。）

陰で俺の悪口で盛り上がってたりしたのだろうか。エイナさんはそんなことする人ではないとわかってはいるが、ついマイナス方面に考えてしまう。

でも、それだけでは俺の《魔法》が破られる理由にはならないはずだ。ほぼ裏方の俺を視認する機会なんて殆どないはずなのだ。何故だ？

何故由比ヶ浜は俺の《魔法》が効かなかった？

未だにオットセイしている由比ヶ浜を無言のまま見続けるのも何だか可哀想に思えてきたので、とりあえず先ほど引っかかった単語について聞いてみる。

「あーっと、とりあえず落ち着いてくれ。その、何だ？えーっと、これはお前が作ったのか？」

《デコポン》といったか？置くタイミングを逃したため、未だに手に持っていたデッコデコのピンクの刀を目で示し問いかける。

「え!?う、うん、そうだよ。《デコポン》っていうんだけど……。どう、かな？」

どうやらこのにひひっと笑うお嬢様系アイドルを思い出しそうな刀は《デコポン》というらしい。デコちゃんに踏まれたい。デコデコのポン刀という意味だろうか。多分違うな。

「どう、って言われてもな。正直、扱いやすそうないい刀だとは思う。軽くて長さもちょうど良さげだし。見た目は最悪だが。」

とりあえず素直な感想を述べておく。ヨイショではない。

この装飾の所為で売れないんだろうが。勿体無い。

「見た目最悪って……、なんかショックかも。でも、う～、ヒッキーに褒められちゃった、どうしよう～!?!?」

俺の感想を聞き、その顔を更に赤らめる由比ヶ浜。え、何？もしかして怒ってたりするの？俺は一体どうされちゃうの？

由比ヶ浜の反応に対して碌なリアクションができないでいると、由比ヶ浜が意を決したように顔を上げる。

「……よし！ヒッキー、それあたしが買ってきてあげる！引き取るって言ったら無料になるし！」

え？なして？

俺が返答に窮している隙に俺の手から《デコポン》を奪い去ってレジに持っていく由比ヶ浜。

何がよしなのかサッパリわからん。寧ろ「よし」より「あし」だと思うんですけど、俺が。

「はい！ヒッキーこれ！」

いつの間にか由比ヶ浜が戻ってきており、俺にその刀を渡してくる。お嬢さん脚早

いっすね。

急いで来たのかちょっぴり荒くなった息が妙に艶かしい。呼吸と同時に上下する豊かな2つのメロンと相まって艶かしさが倍増している。

俺も鼻息とかが荒くなっちゃいそうなので、極力直視しないようにしたためだろうか。その差し出された刀を反射的に受け取ってしまう。

って受け取ってから気づいたが、俺ってもしかしてこの装飾華美な刀でダンジョンに潜るの？黒歴史ものでしょこれ。まぁそれもなんとかならんわけでもないが、やはり断るべきだろう。施しは受けたくないし、後で何か要求されても困る。

期せずして武器が手に入ったことは喜ばしいことかもしれんが、肝心の理由がちっともわからんしな。

由比ヶ浜の息が落ち着くのを待ってから切り出すことにする。まだ顔が赤いが、大丈夫だろう。

「あー、その。悪いんだがこれは受け取れねえわ。」

そう言って反射的に受け取ってしまった光る《デコポン》を差し出す。ヒカリモノな

ら喜んで受け取るんだがな。

「ええ!?」

突き返されると予想していなかったのか、由比ヶ浜が目を見開いて驚きの声をあげる。

「いや、受け取る理由がわからんし。」

こんなデコデコした刀は御免だし。

「理由……。理由はその、なんというか、お礼っていうか！」

ん？お礼？

「お礼って、俺とお前は「あなたたちは一体何をしているのかしら？」

初対面だろ、と言おうとしたところに例の冷たい声が聞こえる。誰だか確認するまでもない。声だけで誰かわかっちゃうなんて、これもう広義においては家族レベルなんじゃないの？

痺れを切らしたのか、はたまた俺が他人と接触しているのを見て近づいて来たのか。

幸い俺たち以外の客が既にいなくなっていた為に雪ノ下が近づいてきていたようだ。気づけばもうかれこれ1時間以上経っている。

「買い物ついでに女性に不埒な行為をするだなんて、本当に身の危険を感じるわね。この卑猥ヶ谷くん。」

全然ちがった。単に俺を不審者だと思ったからでした。ちょっとノーガードすぎませんか雪ノ下さん。内面がゴーリキーすぎる。

突然の第三者の登場にびっくりする由比ヶ浜はさて置き、とりあえずは弁明だな。

「待て雪ノ下。俺は何もしていない。寧ろ話しかけられた側だ。」

「犯人はいつだってそう言うものよ。大人しく真実を話して捕まりなさい。」

どうやら雪ノ下の中では俺が真実を話して捕まることは確定事項のようだ。何それひどい。理不尽すぎません？

雪ノ下と言い合っていると、由比ヶ浜がフリーズから回復し、雪ノ下と俺を交互に見ている。

首を動かすにつれ、だんだんと明るかった表情が沈んだ物に変わっていく。

「大丈夫かしら？この男に何もされなかった？」

雪ノ下も由比ヶ浜の行動を不信がったのか、由比ヶ浜の方を向いて尋ねる。

いやだから何もしてねえって。美人局の可能性ならあるが。

「すっごい綺麗な人……。ヒッキーと仲良さげだし、これって、そういうこと、だよね、やっぱり……。」

雪ノ下の声が届いていないのか、由比ヶ浜は1人自分の世界に入ってしまっているようだ。だが

「いやおい落ち着け由比ヶ浜。俺と雪ノ下は仲良くなんてないぞ。」

「今のを見て仲良く見えるなんて……。1度検査した方がいいと思うわ。」

耳にした不穏な言葉を否定する。雪ノ下にも聞こえていたのだろう、こめかみに手を当てて嘆いている。てか凄い物言いですね雪ノ下さん。

「えっ！そうなの？その、２人は、つ、つつ、つき……あってる、とかそんな関係じゃないってこと？」

２人は、何だって？プリキュア？

「なんかよくわからんが、とりあえず由比ヶ浜が思っているような関係じゃないことだけは確かだと思うぞ。」

よくわからんがとりあえず否定しておく。これで大体の事がなんとかなる。ソースは俺。

「ともかく、場所を変えましょう。聞きたいこともあるし、私に豪語した割にアッサリと正体がバレている誰かさんもいることだし、ね。」

そう言って雪ノ下が店から出てすぐの喫茶店《ラ・フィーユ》の、これまた１番目立ちにくい場所を選んで腰掛ける。

ウェイトレスの制服が可愛いこと、ウェイトレスが猫人族限定なことで、雑誌とかによく取り上げられている有名な喫茶店だ。制服が可愛いだけでなく、飲み物や軽食もレ

ベルが高いのだとか。ただその分ちょっとお値段が割高な喫茶店である。って前に小町が言ってた。

正直言って面倒くさいし今すぐ逃げ出したいが、それをすると余計に不自然だ。それを考えての提案だろう。聡い女である。

「仕方ない。由比ヶ浜、ちょっと付き合ってくれ。」

そう言って歩き出す。これで由比ヶ浜が付いてこなかったら俺すげぇ痛い奴だな。

ちょっと不安になって後ろを横目で見ると、何故か顔を耳まで赤らめた由比ヶ浜がちゃんと付いてきてくれていて安堵する。何？怒ってんの？今の怒る要素あったかしら？俺に名前を呼ばれて怒っている可能性が否定できないのが何とも悲しいところだ。

丸テーブルの一つに腰掛けコーヒーを注文する。喫茶店ってコーヒー一杯でもすげぇ高いんだよなぁ……。なんて貧乏根性を発揮させていると、由比ヶ浜が雪ノ下と俺の間に座り、円卓を囲んで三角形が完成する。

由比ヶ浜がオレンジジュースを注文し終えるのを待ってから雪ノ下が斬り出す。違う、切り出す。

「さて、嘘ヶ谷くん。あれだけ豪語しておいてこのザマなことはもういいわ。不問にしておいてあげましょう。とりあえず、状況を説明してくれるかしら。」

おっと雪ノ下さんたら根に持つタイプ？小皺が将来増えますよ？ただ今回は完全にこっちに非があるため何も言い返せない。何も言えねぇ。

（状況説明と言われてもなぁ）

バレる筈がなかったのに何故か初対面のビッチに話しかけられて刀を押し付けられました。

あ！結局俺この刀持ったままじゃねぇか。忘れてた。

「お待たせしましたにゃん♪」

どう説明したものかと考えあぐねていると、にゃるるる～ん♪としたトーンで猫人族

のウェイトレスが注文した品を運んでくる。

え、こんなテンションの店なのここ？すげぇビッチ臭がするんだけど。

雪ノ下さんなんでこんな店選んだの？さっきから猫耳ガン見してらっしゃいますが、まさかそれが理由とかじゃないですよね？

「黒髪のキレイなお嬢様には特性みるく☆てぃを、茶髪のカワイイお嬢様におれんぢじゅーすを。金髪のご主人様にラフィーユブレンドをお届けにあがりましたにゃん♪」

ウェイトレスのおかしな発言を聞き、猫耳をガン見していた雪ノ下が眉をひそめ、こちらを睥睨してくる。まずいな。

「…え？ヒッキーは黒髪じゃ…」

「にゃ？　それでは、ごゆっくりにゃん♪」

そう言って去っていく猫耳ビッチウェイトレス。やってくれたなあのビッチ。見事に爆弾を投下していってくれたものだ。もう二度と来ねぇ。

「比企谷くん、どういうことか、説明してもらえるわよね？」

完全に命令口調ですね雪ノ下さん。

「何のことかわからないんだがな。」

「そういうのはいいから。早く白状しなさい。」

ダメ元の抵抗も虚しくバッサリと斬り捨てられる。雪ノ下が剣豪すぎる件について。

まぁこの先奉仕部として活動する上で互いの能力はある程度知っておいた方がいいだろう。流石にこの状況で誤魔化すのも無理があるし。仕方ない、説明するか。

「……俺の《魔法》の効果、だ。」

絶対に大丈夫なはずだったんだがな。

「え？ヒッキー魔法使えるんだ！凄い！」

「魔法、ね。概ね予想通りだわ。それがあれだけ私に豪語した理由なのね？」

「まぁ、そうだな。だが何故か、この由比ヶ浜にはバレてしまってな。あの状況はそういうわけだ。」

本当に、どういうわけだかな。油断と偶然の結果としか言いようがない。

「……それで、一体どういった能力なのかしら？」

「まぁ、なんだ。変装・変身の類だよ。よくあるタイプの。俺とある程度会話した奴には普通に見えるが、周りからは真の姿が見えなくなる、みたいな感じだ。」

俺の《魔法》、《フラグ・プリース》は周囲からの認識を変えることができる変装・変身・隠蔽魔法だ。これが結構なレア魔法らしく、なんと自分の姿を消すことも、変えることもできる上に、サイズも変えられるのだ。ただし大きくなることはできず、縮小限定だが。

現在俺の見た目は金髪爽やかボーイになっているはずだ。一応、俺の理想とかは一切

反映されていないと言っておこう。ただ油断すると目の濁りが浮き出てくることがあるので要注意である。

由比ヶ浜の作ったピンクの刀でも大丈夫だというのはこの為だ。

「……なるほど、ね。まだ疑問点はあるけど、とりあえずは納得しておきましょう。由比ヶ浜さん、だったかしら？」

かなりぼやかして説明したところ、どうやら雪ノ下はそのことに気づいたようだった。そりゃ普通そうだわな。由比ヶ浜はほへーっとしている。アホの子みたいだな。実際そうだろうが。

急に話を振られて由比ヶ浜がほへっ!?と間抜けな声をあげる。

「あなたはどうしてこの男に話しかけたのかしら？」

「え、だって、ヒッキーがギルド辞めたって聞いたのに、武器見てるから、冒険者になる

のかなーって思って。」

雪ノ下達の会話を尻目にサトウとミルクをどぱどぱ入れる。せめてもの腹いせに、この店のサトウとミルクを全部使う勢いで使ってやる。……ちっちぇな、俺。

「ってヒッキー！何やってるの!?」

どこぞのハオ様みたいなことを言っていると隣から驚きに満ちた声があがる。

「いや何って、サトウとミルクを入れてるだけだが？」

オーバーソウッ！ホワイトコーヒーの完成だ。（ブラックコーヒーの対義語）

「比企谷くん、その量は『だけ』とは言わないわ……。」

またもや雪ノ下さんがこめかみに手を当てておられる。

「別にいいじゃねぇか。甘いのが好きなんだよ。」

まったくエイナさんといい君たちといい……。この良さがわからんのかね！

言っても無駄だと諦められたのか呆れられたのか、雪ノ下が一つ溜息をつく。幸せが逃げちゃいますよー？幸せじゃねぇから溜息出るんだけどな。不幸せスパイラル理論の完成だ。

「話を戻しましょうか。由比ヶ浜さんの言う通り、この男は粗相を働いて冒険者となったのよ。私はその監視役、といったところかしら。これから奉仕活動を行うことになっているの。」

「いや待て待て、俺がいつ粗相を働いた。粗相すら働かない自信があるぞ。」

働いたら負け。俺も週休８日を希望する！

「ほうしかつどう??」

あれスルーですか？ちょっと凹む。

てかこの反応、奉仕活動の意味分かってないんじゃ……。アホの子だな。（確定）

「ええそうよ。ボランティア、と言ったほうがわかりやすいかしら。世の為人の為に無償で依頼を受けるのよ。」

おお、ナイスフォローだな雪ノ下。てかやっぱり無償なんすね。

雪ノ下のフォローのおかげか由比ヶ浜がふむふむと頷く。

「えっと、じゃあもしかして、お願いしたらあたしの依頼も聞いてくれるってこと、なのかな？」

そこに気づくとは……。やはり天才か。

だがこの展開ってちょっとマズイんでないの？平塚先生は今日のところはいいって言ってたし。

「ええ、そうよ。でも勘違いしないでちょうだい。あくまで私たちが行うのは奉仕活動。お腹を空かせた人に魚を恵むのではなく、魚を捕る方法を教えるのよ。」

これまた大層なことを……。

また由比ヶ浜がちょっと目を白黒させている。

「えーっと、よくわかんないけど、なんか凄いね！」

アホの子丸出しだった。悪い人にころっと騙されちゃいそうな子だな。

「さっきの口ぶりからすると、由比ヶ浜さんは何か依頼があるのかしら？」

おいおい雪ノ下、真面目すぎんぞ。君子危うきに近寄らず。ここは回避一択だろう？やらなくていい仕事はやりたくないしむしろやらないでおくべきだ。

「うん！実は今、素材集めに苦労しててね。中層に行かなきゃいけないんだけど、１人じゃちょっと無理だからさ。あたしはＬｖ．２だし。」

え？こいつＬｖ．２だったの？すげぇ意外。人は見かけによらないって本当だったんだな。俺は大体見かけで判断されるから都市伝説かと思ってたわ。

「でね？レベルの高い友達と一緒に行こうと思ってたんだけど、今ロキ・ファミリアが遠征中でしょ？だからそっちに行っちゃってて……。一緒に行ってくれる人を探してたの。」

ロキ・ファミリアか。そういえば今は遠征中だったか。毎度ご苦労なこった。

美神フレイヤの営む【フレイヤ・ファミリア】と双璧を成すオラリオ屈指の大派閥、それが【ロキ・ファミリア】だ。ダンジョン探索に割と消極的な輩の多いフレイヤ・ファミリアとは違い、ロキ・ファミリアはダンジョン探索に熱心であり、ギルドから直接遠征に向かうように指令が下っているらしい戦闘系ファミリアだ。【勇者】や【剣姫】、【凶狼】など数多くの高レベル冒険者を保有している。

「でもそろそろロキ・ファミリアは帰ってくるころじゃなかったか？それまで待てば良いだけじゃねぇの？」

ギルドにあった予定表ではもうすぐだったはず、と記憶を頼りに言う。

「それがね、実はあんまり時間がないんだ。今オラリオじゃ《月の石》ブームでしょ？その……れ、恋愛に効くっていう御守りを作りたくって！でもその御守り、月末の流星群に翳さないと効果が出ないらしくって……。」

《月の石》は中層で採れる鉱石の一種だ。大層な名前とは裏腹に、わりと良く採れる。名前から綺麗な石を想像する人が多いが、黒く濁った色をしている石である。ただ、月の光に反応して淡く輝くのだとか。

それが幻想的だとかなんとかで、確かひと昔前に若い女性の間で恋愛の御守りとして流行ったはずだ。

ソースは平塚先生。『ひと昔前』の『若い女性』だからな。ここ、重要なポイントだぞ。

「ちょっといいかしら、由比ヶ浜さん。その……《月の石》ブームというのは何のことかしら？」

どうやら雪ノ下は知らないらしい。確かにこいつ、そういうことには疎そうだしな。

「え!?《月の石》知らないの!?!?」

由比ヶ浜が驚きの声をあげる。こいつ驚いてばっかだな。モモノキファイブの一員かしらん？

「まぁ、なんだ。《月の石》を加工してペンダントかなんかにするのが昔流行ってな。それがまたぶり返したってところだろう。」

とりあえず、雪ノ下にフォローを入れておく。

「だが由比ヶ浜、なんで流星群なんだ？あれは月の光じゃないと効果が出ないんじゃないのか？」

「んーとね、なんかよくわかんないけど、最新の医学？か何かで流星群だと違った効果があるらしいって言ってたんだ」

「なるほどな。とりあえず医学では絶対にないと思うが。」

雪ノ下も納得したのか首肯している。

「わかったわ、由比ヶ浜さん。それは、依頼でいいのかしら？」

雪ノ下が由比ヶ浜に尋ねる。いきなり中層かよ……。

「え!?いいの?でもあたし、そんなお金とか持ってないし……。」

「お金は結構よ。払う必要はないわ。」

アッサリとした雪ノ下の態度に由比ヶ浜が狼狽し、こっちをちらちら見てくる。何?俺の顔に何かついてる?もしくは何かが憑いてるのか。それある!

「……ヒッキーも、手伝ってくれるの?」

「……まぁ、決定権は雪ノ下にあるからな。雪ノ下に任せる。」

躊躇いがちに由比ヶ浜が聞いてくるのでそう答える。雪ノ下は俺の上司らしいし。ブラックすぎる職場として雑誌に取り上げられそうだ。

ホワイトコーヒーを一飲みしてカップを置く。職場が真っ黒だからな。コーヒーくらいは、白くていい。

「では、由比ヶ浜さん。その依頼、奉仕部が責任を持って受けさせて貰うわ。」

残っていたミルクティーを飲み干し、雪ノ下が由比ヶ浜に宣言する。

「ほんとう!?ありがとう、ゆきのん！」

「ゆ、ゆきのん？」

「うん！雪ノ下だから、ゆきのん！」

そう言って由比ヶ浜が雪ノ下に抱きつく。ちょっと？昼過ぎの喫茶店ですよ？

雪ノ下が弱々しく抵抗するが由比ヶ浜は聞いちゃいない。なるほど、雪ノ下は押しに弱いらしい。全く必要ない情報だった。

「そういえば、肝心なことを聞いていなかったわね。」

由比ヶ浜を引っぺがすことに成功し、何事もなかったかのように話を切り出す雪ノ下。帽子の下でちょっと顔が赤くなっているのがバレバレですよ？

「比企谷くん、あなた確か前に【神の恩恵（ファルナ）】があると言っていたわよね。」

「ん、ああ。一応、な。」

「中層に潜ることになるのだけれど、レベルは大丈夫なのかしら？私はＬｖ．４だから問題ないのだけれど。」

そういえば言ってなかったか。あれ？てことはこいつ、俺のレベル知らないまま依頼引き受けちゃったの？それとも俺なんていらないという遠回しな拒絶だろうか。まぁＬｖ．４なら雪ノ下だけでも由比ヶ浜を守って戦えるか。

「ああ、問題ないと思うぞ。防具もそれなりのを買ったし、武器は……見た目が最悪だが、悪くないはずだ。」

それに。

「たしか俺もＬｖ．４だしな。」

比企谷八幡は腐っている。⑦

天に牙を突き立てるかのように聳え立つ白亜の巨塔、『バベル』。迷宮都市の中心にしてダンジョンの『蓋』とされる、ギルドが運営する管理機関本部。

ギルド本部最上階にある執務室で2人の人物が対峙していた。

壁一面を本で埋め尽くすその部屋は、豪奢を極めたかのように様々な趣向品で溢れかえっている。

そんな部屋の奥、書類の山が積み上げられた最高級のデスクの前に立つのは平塚静。元・冒険者にして現ギルド職員の統括主任を務める”若手”の女性である。漢らしい生来の気質に加え、整った容姿と体型から、ギルド職員の羨望の眼差しを一身に受ける人物である。

「これまた随分な勝手を働いてくれたな、平塚。」

そんな彼女と対峙するのは、対照的にでっぷりと太った『豚』のような人物だ。

腹や顎はもちろん、腕や足もぷっくりと膨らんで垂れている。

その癖無駄に豪奢な装飾品を身にまとっているため、豪商のお手本のように見える。

そんな彼こそ、知る人ぞ知るギルド長、ロイマン。ロイマン・マルディールである。管理機関の最終決定権を持つ、事実上ギルド最高権力者だ。

これでもエルフ族である。見る人が見ればむしろ平塚の方がよっぽどエルフに近いと言うに違いない。

（有能なのは確かなのだがね。）

無能なただの豚をギルドの頭に据えるほど、ギルドは落ちぶれてはいない。目の前の豚がここまで肥え太ったのも、また実力の内なのである。

「『主』から許可を得ているからといって、やっていいことと悪いことがあるだろう。」

「そりゃぁあるだろうさ。ただ、適切だと思ったからこその行動だよ。間違ったことはしていないと思うがね。」

「素性のわからない冒険者をバベルの上階に入れ、そして今度は末端までをも入れることの、何処が適切だというのだ！」

ロイマンの非難に対してどこ吹く風といった様子で答える平塚。

そんな態度が癪に障ったのか、ロイマンの語調が強くなる。その顔は、長年の執務仕事で溜まった鬱憤とイライラに満ちていた。

（あれだけの仕事量だからな。癇癪を起こしたくなるのもわからんでもない。）

「まぁそう怒るなロイマン。彼らは信用に足る人物だよ。私も、それに『主』も認めている。そして何より、今回の任務において最重要といっても過言ではないんだ。素性は明かせんがね。」

「だからそれが問題なのだ！いくら貴様が神々と繋がりがあるからといって、そう安易にバベルの上階に入れてもらっては困るのだ！そして挙句の果てにはあの部屋を使わせる？馬鹿も休み休み言いたまえよ!?」

「だがな、ロイマン。悪いが彼らの素性はあまり公にはし辛いんだよ。彼の方も、彼女の

方もだ。部屋の貸し出しについては謝るさ。ついノリでな。」

ノリなどと適当なことをいう平塚に対し、これ以上話しても無駄だと言わんばかりに軽く舌を打つロイマン。

「……まぁいい。それで、要件は何だ？」

「ああ、その【奉仕部】について何だがな。まぁ色々あってボランティア活動をすることになったから、彼ら以外にも人が入るかもしれん。許せ。」

ロイマンの叫びがギルドに木霊した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あなた、やっぱりギルド職員ではなかったのね。」

《ラ・フィーユ》を出てバベルを下る。

俺がレベルを告げた瞬間、由比ヶ浜が叫び声をあげたため急いで勘定を済ませてきた。そんな驚くことか？人は見かけによらないんだぞ？ちなみに都市伝説ではない。

「待て待て、俺は立派なギルド職員だ。勘違いされちゃ困る。」

「でもＬｖ．４って凄いよ！ヒッキーもゆきのんも！」

「……聞きたいことがまた増えたわね。あなたがギルド職員だというのなら、一体いつレベルをあげたのかしら？」

「だから昔少しダンジョンに潜ってたって言ったはずだぞ？今となってはダンジョンなんてまっぴらごめんだがな。」

俺たちは今、バベル地下へと向かっている。そこからダンジョンに潜るためだ。ただ、今日はもう時間も時間であり、ハイペースで進めば行けんこともないだろうが『中層』に進むのはやめておく。

代わりに、当初の目的通り、『中層』へ潜る前にお互いの実力や連携の確認をするため、『上層』の１０階層くらいまでを目処にダンジョンに潜ることになった。

『中層』の基準は、Ｌｖ．４が二人、Ｌｖ．２が一人と満たしてはいるものの、人数が心もとないので個々の連携が鍵となってくる。いかに高レベルといえど、モンスターの大

群に襲われるとひとたまりもない。
そのため、お互いの技量やステイタス、戦闘スタイルを把握しておくことが望ましい。

しかし、これは同ファミリア内での定石である。
3人で話あった結果、明かすのは技量と戦闘スタイルに加え、一部のスキルや魔法の類、という範囲に収まった。説明がいらない、極力避けたいと思われるステイタスは秘匿することができる。
この関係はあくまでも一過性のものに過ぎない。自分のファミリアが不利になるような情報となり得る可能性がないわけでもないので、まぁ当然の措置であるだろう。俺も言いたくないことがあるしな。言いたいことは特にないが。
……てかぶっちゃけ俺は2人のステイタスを全くといっていいほど知らない。雪ノ下に至ってはファミリアすら不明である。なのに俺だけ《魔法》の説明を強要されるって理不尽じゃない？上司の命令に反射的に従ってしまうあたり、俺の社畜としての素養の高さが伺える。

ダンジョンの入り口近くは、現在が昼過ぎという冒険者の活動時間ど真ん中のため、普段は換金やらなんやらでごった返しているのに反して閑散としている。ギルド職員

たちも出そうになる欠伸を噛み殺すので必死である。

そのまま左へ折りて地下へと向かう。迷宮への入り口は、相変わらず、というべきなのだろう。異様な雰囲気を纏っている。

「ヒッキー?どしたの?」

「あ…いや、すまん。なんでもない。」

入り口を見下ろしたまま動かない俺を心配そうに見つめる由比ヶ浜。

「……久々のダンジョンだからな。ちょっと。」

「あら?もしかして怖気づいたのかしらチキヶ谷くんは。」

「ばっかお前、これはその、なんだ、武者震いとかに決まってんだろ。とっとと行って帰ろう。」

なんなら行かずに帰ろう。

そう言って一歩足を踏み出す。翔龍のような螺旋階段をその尾に向けて進む。地上の光が徐々に弱まっていくにつれ、地下、すなわちダンジョンの光が強まっていく。

迷宮のその一階層はゲームでいうならばチュートリアル級のモンスターが主に生息

している。通称、『始まりの道』。ゴブリン、コボルトなど恐らく迷宮に潜った者の大半が最初に相手をする、多くの人間に馴染み深いモンスターたちが出現する。

「私たちのレベルを考えると、1階層では恐らく連携の確認もできないでしょうし、個々の実力から示していきましょう。」

ダンジョンに入るなり雪ノ下がそう告げる。まぁ確かに、Ｌｖ．２の由比ヶ浜はともかく、恐らく俺たちだと遊び相手にもならん。一方的な虐殺と称する方が合っているかもしれない　くらいだ。

特に異論もなかったため首肯する。前衛を雪ノ下、中衛を由比ヶ浜、殿を俺、という順に並んでダンジョンを進む。

編成の理由は、まず第一に俺にブランクがあるので先頭は無理。間違える可能性もあるし。第二にＬｖ２とＬｖ４では誰がどう考えても後者を先頭に据えるだろう。

いまのところ、ぶっちゃけ後方にさえ気をつけていれば、俺の仕事は跡を付けていくことだけである。楽ができて嬉しい。

おしゃべりな由比ヶ浜も、ダンジョン内ということもあってか、比較的静かにしている。

「あ！」

「来たわね。」

由比ヶ浜のペースに合わせながら進むと、前方の壁からコボルトが生まれ落ち、こちらに向かってきた。

このダンジョンでは、モンスターは『壁』から生まれ落ちる。幼体などではなく、全く完全な形で。理由は未だ分かっていない。『迷宮』そのものが生きているのではないか、など言う学者もいるらしい。

犬頭のそいつは、その赤い瞳を爛々と光らせながらこちらに向かって、自身の武器である爪を振りかぶり先頭の雪ノ下に襲いかかろうとする。

対し雪ノ下もまた、背中の鞘から自身の武器を抜く。

抜き放たれた武器は両刃の片手剣。だが特徴的なのはその刀身から掬、刃ですらも雪のように白い点だ。掬に光る紅い宝石がアクセントとなっており、シンプルな美しさがある。

「フッ！」

コボルトが近づくのを待たずに、雪ノ下が地面を蹴り飛ばしてコボルトに向かう。Ｌｖ．４の脚力によって蹴り飛ばされた地面は、５セルチほど抉られていた。俺の心といい、抉るのが得意なんだろうか。

弾丸のような速度でコボルトに肉薄し、コボルトの胸元、魔石部分を素早く一突きする雪ノ下。

モンスターの生命の結晶である魔石を一撃で砕かれたコボルトは即死、雪ノ下は刀身の血を振って飛ばし、両刃剣を背中の鞘に収める。

「おぉ～！凄いねゆきのん！強い！」

「たかだかコボルト１匹でしょう？」

「でも凄かったよ！かっこいい！」

「こ、この程度で褒められても嬉しくないわ。すぐに次の階を目指しましょう。」

由比ヶ浜に褒められた為か少し顔を赤くする雪ノ下。褒められ慣れてないのだろう。それはかとなくチョロインの風体を感じる。

「次はあたしも頑張るからね！」

意気込む由比ヶ浜の願いはすぐには叶わず、その後は特にモンスターの群れに出会うことなく2階層へ。

モンスターに多数遭遇しない限り雪ノ下がその技法で悉く一突きにし屠っていくため、由比ヶ浜の出番もなく、魔石を回収する必要もない。

このペースだと中層まで行けたりするんじゃないだろうか。《月の石》は中層でさえあれば何処でだって採れるため、もしかしたら今日で依頼が終わる可能性もある。

「なんだかこのスピードなら、中層までいけちゃうかもね！」

「かもな。だが雪ノ下は大丈夫なのか？」

でもそれでは雪ノ下の負担が大きすぎるだろう。それはロボットのように正確無比にモンスターの胸を突いていく雪ノ下のスピードあってこその計算だ。

「あら？私の心配をしてくれているのかしら。」

ポーションに口を付けながら問う雪ノ下。やっぱ疲れてんじゃねぇか。

「流石に負担が大きすぎると思ってな。やばくなったら代わる……由比ヶ浜が。」
「あたしなんだ!?」
　当然だろう。働きたくない。むしろ邪魔をしないように働かないのが俺の仕事と言っても過言ではない。
「全くこの男は……。女性に養って貰って、恥ずかしくないのかしら。」
「ばっかお前、世の中に男も女も関係ねぇだろ。男女平等だ。養ってもらうことに羞恥心を覚える理由がない。」
　本当誰か、俺を養ってくれ。ギルドでは事務をやっていたが、ぶっちゃけ何もしないことには勝てないのだ。
「ヒッキー養って貰いたいの？」
「まぁな。第一希望は専業主婦だ。」
「貴方の場合、それは『ヒモ』と言うのよ。」
「いや俺はヒモにはならん。ちゃんと毎日奥さんを労ってやるし家事もするつもりだから。ヒモはヒモでも良いヒモだ。」
「ヒッキー料理できるんだ！なんか、負けた気分……。」
「一応、それなりにはな。」

そうやって他愛もない話をしながら2階、3階層と進んでいく。結局雪ノ下は俺たちと交代することなく、その攻撃でもってモンスターの核を切り裂く。

4階層を進む。この階で徐々にモンスターの数が増えてきた感じだ。雪ノ下と共に由比ヶ浜も応戦している。

「えいー・えいー！」

可愛らしい掛け声と共に両手で構えた中サイズのハンマーでモンスター殴打する由比ヶ浜。

武器は自作なのだろう。俺の《デコポン》と同じように華美な装飾がされている。目に悪い。

Ｌｖ．２の膂力で大きなハンマーを振る様はさながらどこかの撲殺天使のよう。

由比ヶ浜の技量はお世辞にも良いとは言えず、危なっかしいものの、一撃も受けることなく雪ノ下と共に敵を倒していく。

俺も見ているだけではなく、由比ヶ浜たちの後ろに迫ったモンスターを《デコポン》で切り飛ばしながらせこせこと魔石を回収。俺の貧乏根性が仕事をしている。

てか《デコポン》やっぱりいいな。軽い上に攻撃力もある。でも見た目がなぁ……。《デコポン》の見た目とそれに反して良い性能に複雑な思いを抱いていると、どうやら先頭の戦闘も終わったようだ。シャレではない。

遠目から見る限りでは、雪ノ下と由比ヶ浜の連携はちゃんと取れているように思える。連携というよりは、雪ノ下が由比ヶ浜のフォローをしているような形だが。由比ヶ浜の背後に迫る敵を倒したり、由比ヶ浜にも返り血がかからないようにしたりと。親子みたいだ。あれ？八幡ったらいらない子？

「そろそろ5階層ね。この調子でいきましょうか。」

ポーションを飲み干し、雪ノ下がそう言う。やはり疲労が大きいのだろう。八幡ちょっと罪悪感。

「うん！頑張ろうね！」

まだ潜ってから1時間も経っていない。このペースだとマジに中層行きかもしれな

い。

今のところダンジョン内に目立ったイレギュラーもない。無くて結構なのだが。

５階層へと降り、ダンジョン内を進んでいく俺たち。先ほどまで薄青い色をしていたダンジョンの壁は、少し緑が入っている。５階層の証拠だ。

「ここからは少しだけ慎重に進みましょうか。」

５階層からは今までの１～４階層と違い、「キラーアント」など少し厄介なモンスターが登場してくる。Ｌｖ．２の由比ヶ浜のことを考慮した提案だろう。

「比企谷くん、先頭を任せるわ。貴方の戦と……技量を把握したいの。」

ちっ、気づいたか雪ノ下。

「ああ、わかった。」

内心を隠しながら了承する。流石に雪ノ下に任せすぎだろう。かといって由比ヶ浜を先頭に出すわけにもいかんし。

雪ノ下とポジションを入れ替え、前衛へ。
ペースを心持ち落として進む。
先ほどまでは彼女たちの背中を追っているだけだったが、こうして先頭に立ちダンジョンを見ると昔のことを思い出しそうになる。
暗く果てしない道程。何が原因で命を落とすことになるのか神にもわからない化物の坩堝。
自然と腰に下げた華美な刀に手がいく。冒険者って本当に底辺職すぎるでしょ。何が楽しいのん？

「ヒッキー、あれ！」

己を守るために冒険者を心中で貶していると、奥の側壁に亀裂が入る。
俺たちの目の前で生まれ落ちたのは3体のウォーシャドウ。
主に6階層に出現する黒一色の人型モンスターであり、武器はそのひょろ長い腕の先についた3本の鋭利な指。
ナイフのようなその鋭い指をもった奴らは純粋な戦闘力だけで言えば間違いなく6階層随一である。

ウォーシャドウがこちらに気づき、向かってくる。ウォーシャドウに挟まれる形になるのは由比ヶ浜が危険だ。

俺はそう判断し、まず優先的に先頭の2体を目標に定める。

「シッ！」

ダッシュと共に《デコポン》を握り、目の前に迫った左側にいるウォーシャドウ目掛けて一閃。

左下からの切り上げにより魔石を砕かれたウォーシャドウは霧散し、その黒い身体を消していく。

その勢いを殺さずに身体を回すことによって、隣にいたもう一体のウォーシャドウの鉤爪を躱し、その振り下ろされた腕を上段斬りで吹き飛ばすことに成功する。よし。

「ヒッキー！」

「うおっ！」

由比ヶ浜の声と同時にバックステップし、正面に迫った3体目の攻撃を避ける。

今のはちょっと危なかった。由比ヶ浜に感謝だな。

ウォーシャドウ程度の攻撃をＬｖ．４の俺が受けたところで大したダメージにはならないだろうが、それでも痛いのは嫌だ。

右腕を伸ばして飛び込んでくる３体目のウォーシャドウを待ち構え、その右腕をウォーシャドウの身体の下に潜るようにして屈んで避ける。

さらに、屈むと同時に片脚に体重をのせ、その脚を軸に身体を反転。

「フッー」

肩に乗せた《デコポン》を真上に飛んでいる３体目のウォーシャドウの腹を斬るように振り下ろす。

自身の推進力と相まって綺麗に通った刃はそのまま股下から頭にかけてを斬り裂き、魔石を砕く。

昔平塚先生に教えて貰った『背負い投げ』という極東の技をアレンジした技だ。無刀の状態でやるソレも教わっているがモンスター相手では余り使ったことがない。

３体目のウォーシャドウを倒して立ち上がると、ちょうど片腕を失ったウォーシャド

ウを由比ヶ浜と雪ノ下が倒したところだった。
由比ヶ浜もダメージを貰っている様子はなく、３人共無事である。
「ヒッキーお疲れ様！なんか、その、か、かか、かっこよかった……かも。」
「え、お、おう。」
かもってなんだよ、と口に出すつもりが全然言葉にならない。
危ない危ない。昔の俺だったら好きになってるところだ。ぼっち界のスーパーエリートであるところの今の俺には通用しないが。
「比企谷くん、さっきの技は平塚先生に教わった物ね？」
変な空気を壊すかのように雪ノ下の冷えた声が刺さる。ありがたい。
「ああ。雪ノ下も平塚先生から教わったのか？」
「ええ。本当に平塚先生に教わっていたのね。」
「いやちょっと？今まで疑ってたってこと？」
「そうよ？」
さも当然と言わんばかりに言う雪ノ下。ちょっと！その首をコテン、と傾げる動作や

めて！可愛い顔とのギャップで余計に傷つくから。

「平塚先生？」

「こっちの話よ、由比ヶ浜さん。そろそろ行きましょうか。」

知らない名前が出てきたためだろう。由比ヶ浜が不思議そうな顔をする。

懐かしい。俺も昔周りの会話の中に知らない単語が出るとそれを聞くことで会話に入ろうとかしたもんだ。でも結局無視されるか「秘密ぅー！」とか言われてすげー凹むんだよな。あいつらだけは許さねぇ。

ほれみろ、由比ヶ浜さんもちょっとご不満なご様子だ。俺と雪ノ下を交互に見ては「２人の……やっぱり……」とか呟いてる。

「あー由比ヶ浜、平塚先生ってのは雪ノ下と共通の知り合いの人だ。昔ちょっと戦闘技術を教えて貰ってな。そんな感じだ。」

何が「そんな感じ」なのかは自分でもよくわからないがとりあえずフォローを入れておくことにする。疎外感って辛いからな。マジで。

「そーなんだ。ちょっと会ってみたいかも。」

自信がなかったがどうやらフォローに成功したらしい。フォローするような間柄になったことすら少ないため、失敗したことないんだけどな。

「ーーー!!!」

会うのは止めとけ、と言おうとした刹那、異様な雰囲気が辺りを包む。

変な空気だ。明らかな違和感。俺と雪ノ下は当然のこと、由比ヶ浜も感じとっている様子。

いざ歩き出そうとしていた足を止め、ダンジョンの奥を見つめる。

何か、いる。ブランクはあるものの、俺の勘がそう告げている。

ズゴン!

違和感は徐々にその凄味を増していき、底冷えのするような音が反響して聞こえてくる。

「行きましょう。」

唐突に雪ノ下が言う。
「ここで待っていても駄目よ。こちらから出向きましょう。何かがこの5階層にいるわ。」
「待て、雪ノ下。ここは引き返すべきだ。由比ヶ浜もいる。」

行く、という雪ノ下を少し強めに制する。おそらく俺たちの主目的であるダンジョン調査のことを考えての発言だろう。だがそれはマズイ。
ダンジョン内でのイレギュラーはそのレベルや装備に関わらず、冒険者たちを翻弄する。俺と雪ノ下の2人ならともかく、ここは逃げの一手だろう。

「……そうね、ごめんなさい由比ヶ浜さん。引き返しましょうか。」
ちょっと低い声を出したからだろうか。雪ノ下が発言を撤回する。いやでもあれ？謝る人違うくない？あれ？
「う、うん、そうだね。なんか怖いし、帰ろっか！」
たははーと由比ヶ浜が笑いながら元気に言う。怖いのだろう、少し無理しているのがわかる。

元来た道を引き返そうと背を向けた、その瞬間。

ズドドドドド！

けたたましい音が鳴り響く。何かが壁を壊しながら走る音だ。近い。

向けた背を戻し、音の方角へ目を向ける。

音が近づき、空気の震えが伝わってくる。

「う、うそ……」

「こいつは……！」

「何故……」

三者三様、十字路に立ちすくみ驚く俺たちの目の前に現れた、それ。

５階層では出現するはずのないモンスター。主な出現階層は１５階層。

２Ｍを超す赤茶色の体毛に覆われた巨体。

その頭部に備わる、そのモンスター最大の特徴とも言われる２本の鋭い角。
紅く光る獰猛さを秘めた双眸を持つ、『雄牛の化物』。

ルーキー殺しとも言われる眼前の大型モンスターの名は、『ミノタウロス』。

「ヴモオオオオオオオオッッ!!!!!!」

牛頭人体の巨躯を振り乱し多くの冒険者を死に追いやってきたそいつら。

Ｌｖ．２〜３が数人がかりで狩るのが適性とされる雄牛が２匹、こちらに迫ってきた。

比企谷八幡は腐っている。⑧

ーーーーーーーミノタウロス。

《中層》である15階層に主に出現するとされる、大型モンスター。

第三級冒険者の壁となる雄牛の化物。

その肉は断ち難く、硬い。

盛り上がった筋肉から繰り出される攻撃はその巨体からは想像もつかないほど鋭く速く。

またその双角を使った突進はそのモンスターの必殺技と称されるほど強烈だ。

「何故ミノタウロスが、５階層に……!?」

なんで私が東大に!?と何処その予備校のような発言をする雪ノ下。あの赤と緑の双

子は一体何なんだろうか。

「ひ……ぁ、ぁあ」

「由比ヶ浜、しっかりしろ。大丈夫だ。」

恐怖に駆られた由比ヶ浜を鼓舞する。

状況が悪い。由比ヶ浜はＬｖ．２だ。それに比べ俺と雪ノ下はＬｖ．４、ミノタウロス程度に負けるとは思わない。由比ヶ浜も簡単にやられるようなステイタスではないはずである。

だが複数体となれば話は別だ。今ミノタウロスはまだ２匹しか現れていないが、ダンジョンはいつ何が起こるかわからない。いつ３体目、４体目が現れるとも限らない。この５階層でミノタウロスが発生していた場合、由比ヶ浜が多数のミノタウロスに囲まれる可能性もある。

由比ヶ浜を落ち着かせようと見栄を張ったものの、現状の最悪さには変わりない。

落ち着け、俺。
考えろ、思考を止めるな。

……まず今回の場合、逃げるのは得策ではない。ミノタウロスたちは既に俺たちを視認しており、現に今も俺たちに向かってきている。

だとすれば。

「雪ノ下、由比ヶ浜を任せる。」

「何を言っているのかしら？私が行くわ。貴方が由比ヶ浜さんを守ってあげてちょうだい。」

おっとお??雪ノ下さん？

……ちょっとかっこつけて言ったのに。

だがしかし。

「いや、俺が行く。任せたぞ。」

「ちょっと、比企谷くん!?」

雪ノ下に強引に由比ヶ浜を任せ、ミノタウロスたちのもとへと肉薄する。

「「ヴモォォォォォォ!!!」」

幸い十字路であるため、由比ヶ浜たちの元に向かうには俺を打破しなければならない。

……横や後方からミノタウロスが飛び出して来ないとも限らないが。

まずは。

「《泉に落ちた黄金の鞠》」

隠蔽の魔法《フラグ・プリース》を自身と武器にかけ、姿をけす。

（久々に、この魔法本来の使い方ができるな。）

まずは左のミノタウロスへ。

此方を視認できていないミノタウロス、その股下を滑るように抜けて奴の背後をとる。

（まずは……ここ、だ…ッ！）

すぐさま立ち上がり、抜刀。

狙うはミノタウロスの両脚。その丸太のような脚に連撃を放つ。

「ヴォァァァァ!?!?」

背後からの不可視の斬撃により脚を失った為、前のめりに倒れるミノタウロス。

その隙にもう一体のミノタウロスへと向かい、その胸を突き破る。

唐突な攻撃になす術もなく塵と化す雄牛。

1匹を仕留めた隙に後方の雪ノ下たちを見やる。

……どうやらミノタウロスは出てきていないようだ。

とっとと片付けよう。

脚を失い満足に歩行できないミノタウロス、その背に刀を突き立てる。

……俺の魔法《フラグ・プリース》は本来、戦闘時に使う魔法だ。

隠蔽・変装の魔法は偵察や探索に適しており、昔俺がギルド職員になる前、ソロでダンジョンに潜り続けることができたのもこの魔法によるところが大きい。

隠蔽の常時使用による『不可視の攻撃』。俺が昔ダンジョンに潜る際に最も得意としていた戦法。

核である魔石を砕かれたミノタウロスは霧散し、跡形もなく消え失せる。

（……3体目は来ないようだな。）

2匹のミノタウロスがやってきた方に注意を向け、追撃が来ないことを確認。

「ガァァァァァァ!!!」

突如後方から声が響き渡る。

声に反応雪ノ下たちの方へと向き直ると、ちょうど雪ノ下がミノタウロスの左腕を切り飛ばしているところだった。

雪ノ下を残して良かった。恐らく横からやって来たのだろう。３体目のミノタウロスが雪ノ下に迫る。

「フッ！」

ミノタウロスの繰り出す攻撃を側面に刀身を当てて紙一重の差で躱し、そのまま残りの腕を斬り飛ばす。

それは技量、レベル、剣の性能全てによって成される攻撃。

雪ノ下を助けることも忘れて只々その姿を見つめる俺。

（綺麗だ）

状況が状況ではあるが、不意にそんなことを考えてしまった。

雪ノ下がミノタウロスの胸に３連の突きを叩き込み、ミノタウロスが砕け散る。

「……何かしら比企谷くん。」

「……あ、いや、別に。何でも。」

こちらを見やった雪ノ下と目が合う。好きだとは気づかないが。目と目が合う～。

「由比ヶ浜さん、大丈夫？」

俺の返答を聞く前に雪ノ下が由比ヶ浜に駆け寄る。

「ゆきのーん!!!」

「きゃっ！ちょ、ちょっと由比ヶ浜さん!?」

安心したのか由比ヶ浜が目に涙を浮かべながら雪ノ下に飛びつき押し倒す。ちょっとお二人さん？マリア様が見てるぞ。

そんな2人を尻目に3体目のミノタウロスが来た方向を見る。

ここから更に奥は少し開けた場所になっていたはずだ。

「ヴォォォォーーー」

「うぁぁぁぁぁ！」

耳をすますと、その奥からミノタウロスの物と思われる咆哮。そして……冒険者の声。

（……襲われてるのか？）

「比企谷くん」

「ひゃ、ひゃい!?」

「気持ち悪い声を出さないでくれるかしら。……それより、まだ奥にいるわよ。」

びっくりした。心臓に悪い。発言が心に刺さることも含めて。

いつのまにやら雪ノ下と由比ヶ浜がこちらに来ていた。相変わらず由比ヶ浜は雪ノ下にしがみついたままだが。

「あぁ、みたいだな。どうやら冒険者も襲われてるみたいだ。」

「……比企谷くん。」

雪ノ下が顎に手を当て何かを思考しながら俺に問いかける。何をしても絵になるやつだ。

「なんだ？」
「上司命令よ。確認してきてちょうだい。」
　だろうな、そうくると思ったよ。
「【奉仕部】としての活動よ。」
「お前は？」
「……由比ヶ浜さんを見てるわ。」
「はぁ……わかったよ。」
「あら、やけに聞き分けがいいわね？働く気になったのかしら？」
「そりゃお互い様だろ。」

　さっきあんなに戦おうとしてたくせに。

「それに、ここで見捨てても気分が悪いだけだろ。上司命令だしな。仕方がない。」
「そう。」
　そうだ、仕方がない。上司命令だからな。

「……行ってくる。」

気恥ずかしさから熱くなった顔を背けて声のする方へと駆け出す。

それにしても、何でまたこんなところにミノタウロスが？

モンスターはその階層を上下することはあってもせいぜいが1～2階層だ。10も下のミノタウロスが理由も無しにこんなところへ登ってくるなんてことは普通考えられない。

ミノタウロスはＬｖ．４の俺たちにとっては雑魚に等しい。雪ノ下1人でも由比ヶ浜を守れるだろう。あいつの技量は凄まじい。

ダンジョン内の広場を駆け抜け、音の発生する方向へ。

「うわぁぁぁぁぁあっ!!!」

冒険者の声だ。まだ幼さを感じる。ルーキーだろうか？
それと同時にミノタウロスの咆哮、壁を破壊する音が聞こえてくる。
「……こっちか。」
左へ折れると、まさに駆け出しという風体の白髪の少年がミノタウロスから逃げているのを目にする。
初心者用の胸当てとベージュのコートを靡かせて走る少年と、それを追うミノタウロス。

そして、その直後に走り抜ける、金の光。

（あれは、まさか【剣姫】か？）

青を基調とした軽装を身につけ、その美しい髪をはためかせ走るロキ・ファミリアの一角。

金の光の向かった先へ走る。

「ひぃぃぃぃぃ!!」

右へ折れると、そこは行き止まり。

「ヴモォォォォォォッ!!」

最奥の壁に背をつけ座り込んだ少年に迫るミノタウロスが見える。

不味い、とは思わなかった。

ミノタウロスは背後に迫る彼女に気づいていない。

ミノタウロスがその振り上げた拳を少年に叩き込もうとした刹那、その背後からその脚めがけて剣を振るう【剣姫】、アイズ・ヴァレンシュタイン。

脚をやられ膝を落としたにも関わらず向かってきたミノタウロスの攻撃を避け、その身体を真っ二つにする【剣姫】。

（これで一安心か。完全に徒労だったな。）

なんだか無駄に熱くなってしまった気分だ。

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

元来た道を引き返そうとして振り返る。何だ?また出たのか??

「うぉっと」

俺の横を悲鳴をあげながら通り抜ける真っ赤な少年。先ほどの剣姫の攻撃によってミノタウロスの返り血を浴びたのだろう。牛臭い。

「あ……。」

彼の来た行き止まりを見ると、そこにモンスターの影は無く、何故か惚けているアイズ・ヴァレンシュタインがいた。

（……ああ、そういうことか。）

あの白髪を赤く染めた少年、どうやら気恥ずかしさから逃げた様である。
（ま、頑張れ少年。）
砕け散ることで大人になるのだ。応援の仕方が完全に斜め下だった。

「そこに居るの……誰？」

少年に向けて叱咤激励していると、アイズ・ヴァレンシュタインが気づいたのか、通路の奥からその金の瞳でもってこちらを見ている。

え、ちょっとマジなの？見えないはずでしょ？気配的なやつ？何あの子サイヤ人？

とりあえず、面倒臭いことになる前に逃げよう。
そう早々に決断して元来た道を引き返す。

追ってくる気配はない。確か【剣姫】は現在Ｌｖ．５、俺より１つ格上だ。俺も敏捷

には少し自信があるが、先ほど目にした彼女のスピードには恐らく負けるだろう。

（それにしても【剣姫】がここにいる、ということは。）

来るときに通った広場を通り抜け、雪ノ下たちの居場所へ向かう。

（帰ってきてるんだな、ロキ・ファミリアが。）

雪ノ下たちと別れた十字路へ到着すると、雪ノ下たちはその向こう、逆側の広場に行ったようだ。壁に真新しい矢印が刻まれている。

十字路を直進して雪ノ下たちの元へ。

広場が見えてくるにつれ、そこに人影が２人以上いるのに気がつく。

広場に立てられた旗に刻まれしは道化。
狡智の神・ロキの眷属であることを示す大派閥のマークだ。
「《泉に落ちた黄金の鞠》」
《フラグ・プリース》を再度唱えて変装し、その速度を緩める。
「ヒッキー!!!」

広場の中心にいた由比ヶ浜がこちらに気づいたのか、手を振り合図してくる。
ちょっと由比ヶ浜さん?その名前大声で呼ぶの止めてくれません?

「冒険者はどうなったのかしら?」
「ああ、問題ない。ミノタウロスは【剣姫】が倒した。」

雪ノ下の問いに答えつつ、2人の居る場所へ。
どうやらロキ・ファミリアの眷属と話をしていたようだ。
「君も彼女たちの仲間かい?この度は迷惑をかけて本当に申し訳なかった。」

俺と目が合うと、すぐにそう言って頭を下げる金髪の小人族。

「僕の名前はフィン・ディムナ。ロキ・ファミリアの団長を務めさせてもらっている。よろしく。」

「……ああ、よろしく。」

こいつがあのロキ・ファミリアの団長、【勇者（ブレイバー）】フィン・ディムナか。

細身の身体、幼い顔立ち。小人族特有の体型と容姿をした少年はＬｖ．６にして大派閥を纏め上げる能力を持った第一級冒険者。マジで人は見た目に寄らねぇな。

「君たちが倒したミノタウロス、あれは実は僕たちの責任なんだ。こちらの不手際で１７階から上へとミノタウロスを逃がしてしまった。討伐協力に感謝するよ。」

（成る程、そういうことか。）

ディムナの話を聞き、どうやら今回の騒動が俺たちの極秘任務に関係がある物ではないことを知る。

管轄外、ということになれば後は知らん。

「雪ノ下、どうなんだ？」

こちらのリーダーである雪ノ下に丸投げする。

「別に気にしないわ。由比ヶ浜さんも、それでいいかしら？」

「うん！３人とも無事だったしね！」

どうやら俺がくる前に話をしていたのか、若干食い気味に答える２人。

「ありがとう。」

ディムナが一言だけそう告げ、その後二言三言雪ノ下と会話してからチームを引き連れて去る。

戻ってきていたアイズ・ヴァレンシュタインと一瞬だけ目が合った気がしたが、恐ら

く気のせいだろう。美少女と目が合うだなんてことは大体がこちらの勘違いだ。自意識過剰。

去っていくロキ・ファミリアを見送り、取り残される俺たち。
「……今日はもう引き上げましょうか。連携という程ではないけれど、実力の確認は一応できたのだし。」
「時間も時間だしな。」

あれからそれなりに時間が経っている気がする。地上は夕方手前くらいだろうか、今から中層へ行って帰ってくるには時間が足りないだろう。
「由比ヶ浜さん、《月の石》はまた明日、ということで大丈夫かしら？」
「うん！まだ日にちには余裕あるし、全然大丈夫だよゆきのん！」

３人で隊列を組み、地上を目指してひたすら歩く。

（今回の件、一応平塚先生に報告しといた方がいいだろうか。）

帰りも殿を務める俺は、列の後ろで今回の件について考えていた。

１７階層からミノタウロスが逃げた。確認しているだけで４体、恐らく逃げた数はもっと多いだろう。

ただ、何故ミノタウロス達は逃げたのか。

そして、何故ロキ・ファミリアが逃げられなければならなかったのか。

早速始まった異常（イレギュラー）の胎動の匂いを感じる。

やはりダンジョンは、最悪の場だ。

願わくば、厄介なことになりませんように。

由比ヶ浜結衣は困っている。
由比ヶ浜結衣は困っている。①

迷宮都市オラリオ。魔石産業で発展したこの都市は、昼と夜とでその姿を変える。

冒険者たちがダンジョンへ潜り、商売人たちが街道へ繰り出す昼。

戻ってきた冒険者でごった返す夜。

眠らない街とも称されるオラリオの夜は今日も喧騒に包まれていた。

ダンジョンから帰り、本日の冒険譚を語って聞かせる冒険者たち。

そんな冒険者たちを受け入れ労をねぎらってやる酒場や娼館。

バベルを中心に八方に伸びる各メインストリートはそんな酒場や飯屋の灯りが煌々と輝いている。

そんな陽気なオラリオの夜とは打って変わり、俺は今、暗い路地裏を歩いている。

酒場に好きこのんで行く趣味はない。粗暴で野蛮な冒険者どもの巣窟である。ある意味ダンジョン以上に危険かもしれない場所なのだ。

ロキ・ファミリアと別れてからダンジョンから出ると時刻は既に夕暮れだった。東の空は群青色に染まっていた。夜と夕陽の輝きの境目にあるあの色は一体何色と言うのだろうか。

あの後、雪ノ下、由比ヶ浜と明日の予定を決めて解散。俺が逃げ出さないように釘を刺し、雪ノ下と由比ヶ浜はディナーに向かって行った。というよりも由比ヶ浜が一方的について行ったようなものだが。

……ついでに言っておくが俺も一応は誘われたんだぞ？断っただけなんだからな？

現在俺が向かっているのはバベルから北北東、ちょうどメインストリートの間を縫うように直進している。

目的地はとある屋台。

目印となるＢＡＲを右手に折れ、目的の屋台へ着くと、本日待ち合わせている人物は既に到着していた。

「早いっすね先生。」

「君は時間ちょうどだな。相変わらずだ。」

既に一杯やっていたのか少し顔が赤らんでいる。

白衣を纏った彼女の名前は平塚静。ギルド統括顧問というエリート独身職員だ。

「比企谷、君は何にする？私はショウユだ。」

「じゃ、俺もショウユで。」

現在、俺と平塚先生はとある屋台に腰掛けている。客は俺たちだけ。

この店のメニューは「ラーメン」という東から伝わった料理なのだが、これがまたすげぇ美味い。

隠れ名店ということで噂となっている。（俺調べ）

「比企谷、今日はどうだったかね？」

寡黙な店主にショウユラーメンを2つ頼み、平塚先生が聞いてくる。

「ぶっちゃけこの仕事もう辞めたいんですけど。ちょっと色々あって疲れました。」

「ダンジョンの話だよ。君の感想はいらん。」

ですよねー。知ってた。

「それで？色々というのは何だね？」

平塚先生に掻い摘んで話す。由比ヶ浜の依頼を引き受けたこと、５階層にミノタウロスが出たこと、それがロキ・ファミリアが逃した物であったこと。

「まぁ今日は大体そんな感じですかね。」

「ヘファイストスの鍛冶師にミノタウロス、ロキ・ファミリアか……。なるほどな。」

出てきたラーメンを受け取りながら平塚先生が妙に得心したかのように頷く。

俺もラーメンを受け取りさっそくいただく。

すすり、飲み込む。夜風に冷えた身体に染み込むスープの旨味がたまらない。
会話を切り、一心不乱に食す俺と平塚先生。やはりラーメンこそ至高。隠れ家的雰囲気もポイント高い。

スープの一滴も残さずに2人とも完食する。丼を持ってスープを飲む平塚先生の姿は一周回って魅力的ですらある。

「まずそのミノタウロスの件だが、どうも妙だな。」

「ええ、俺もそう思います。あのロキ・ファミリアがそうやすやすとモンスターを、それも5階層まで取り逃がすとは考えられません。」

「モンスターの大量発生、ということだろうがな。その数が圧倒的に多かったなら、ありうるが。」

まぁその可能性も確かにある。だがロキ・ファミリアが狩りきれないほどの量となれ

ばすなわち【奉仕部】の管轄ということになってしまう。

「……やはりダンジョンで何かが起こっているのか、はたまたその前兆なのか。」

タバコに火を灯した平塚先生がそう呟く。

「ま、その件に関しては君たちに任せよう。早速のイレギュラーだ。慎重に調査してくれたまえ。」

「やっぱ俺たちの仕事なんすね。」

「もちろんだ。期待しているよ。」

店主から灰皿を受け取り平塚先生が快活に笑う。

「さて、【奉仕部】の奉仕活動のことなのだがね。」

「今は由比ヶ浜の依頼中ですので別件との掛け持ちはちょっと。」

「心配するな、誰も仕事を増やすとは言っていないよ。」

いや結構ケチャップ感覚で増量してると思うんですけど。ケチャップ増量。

「今日ロイマンに掛け合ってきてな。【奉仕部】の拠点としてあの部屋を正式に借りてきた。今後の依頼は私を通して発注することにするよ。」

「え？あの部屋勝手に使ってたんですか？」

「まぁね。何、心配はいらんよ。」

「これで俺クビになったりしませんよね？」

「表向きはもうクビになってるよ。」

ぐ、そうだった。

３本目に火を灯す平塚先生。

タバコは身体に悪いらしく、独特の香りを嫌う人もいるが、俺はあまり嫌いではないし、平塚先生の吸うタバコは嗅ぎ慣れた匂いだからだろうか。ちょっと和む。

「今は由比ヶ浜とやらの依頼に精を出すといい。それにしても《月の石》か。また懐かしい物を。」

そう言って何かを懐古するかのような瞳をする平塚先生。過去に何があったのだろうか。

「そういえば昔先生も持ってましたよね。」

昔の平塚先生（当時２Ｘ歳）が意気揚々と中層に潜り、三日三晩かけて月の石を選別、乱獲してきたことがあったようななかったような。

……その１週間後、やけ酒に付き合わされたが。

「《月の石》なんて所詮は御守りにすぎん。なーにがあの人も振り向くだ。世の中嘘だら

けじゃないか……。くそう、結婚したい……。」

何があったのか大体想像できてしまう自分が少し恐ろしい。早く誰か貰ってやってくれよ……。

いつものことに面倒くさそうな顔をしていると、立ち直ったのだろうか。平塚先生が目元を拭い、急に真面目な顔をする。

「さて、比企谷。《月の石》ということは『中層』だな。君と雪ノ下の心配は特にしていないが、その由比ヶ浜という少女はどうなんだ？」

「Ｌｖ．２なんで早々簡単にやられたりはしないと思いますが、ちょっと戦闘技術がヤバそうですね。囲まれたらマズイかもしれません。」

それに。今日のミノタウロスの事件でわかったことだが。

「どうもあいつ、大型モンスターにビビりがちというかですね。」

今日の由比ヶ浜はミノタウロス相手にほぼ腰を抜かしている状態だった。Ｌｖ．２の冒険者がミノタウロスに出くわしてテンパるのは分かるが、流石にあれはビビりすぎている。

「そうか。中層からはオークやミノタウロスが出現するしな。モンスターの出現数も上がる。大丈夫そうか？」

「雪ノ下もいるんで、大丈夫だとは思いますが。サラマンダーウールとかは用意しといた方がいいかもしれません。」

「まぁ滅多なことはないだろうがな。雪ノ下も中々腕が立つ。ただ、今のダンジョンは何かが変だ。注意して臨みたまえ。」

「……わかりました。」

ダンジョンでは何が起こるかわからない。レベル適正値を十分に満たしているからといって、死なない保証などないのだ。

「装備は十分に整えて行ってくれ。……その刀も、中々のものだとは思うがね。見た目はアレだが。」

先ほどとは打って変わって平塚先生がニヤけだす。

「なんか成り行きでコレになっちゃいましてね。悪くはないんですが。」

常時隠蔽をかけているからといっても、流石は平塚先生。見抜いていたようだ。

由比ヶ浜に貰った《デコポン》は今俺の背中にかかっている。断ちにくいとされるミノタウロスの肉に引っかかることなく斬り裂ける良性能だ。本当見た目だけがアレだが。

「君の場合は《魔法》があるから装備品に気を使わなくてもいいだろうな。２人をよろし

く頼むよ。」

４本目を吸い終えて平塚先生が立ち上がる。さらっと俺の分の代金を支払ってしまうあたり、本当この人かっこよすぎる。エイナさーん！出番ですよー!!

「比企谷、ちょっと家に寄っていきなさい。」

店を出て少ししてから平塚先生がそんなピンクの台詞を言ってきた。

「なんでですか？」

理由はハッキリわかっているものの、知らないフリをして問い返す。

「わかっている癖にな。ステイタスの確認だよ。」

こちらを振り向かずに平塚先生が言い放つ。

「あれから随分と経つ。今後の調査にもステイタスの確認は必要となってくるだろう。」

「自分でステイタスが見られないのも、不便だろうしな。」

【神の恩恵（ファルナ）】とは、神が下界の子供らにその力の片鱗を与え、様々な事象から経験値（エクセリア）を生み出させ、成長させる神々の力のことを指す。ほとんどの冒険者はこの【神の恩恵】を宿し、その力でモンスターを狩る。

人目の多い大通りを避け、裏路地を進み平塚先生の家へ。シックな雰囲気の部屋は相変わらず趣味が良い。

「比企谷、脱げ。」

着くと同時に平塚先生がそう告げる。字面だけ見ると結構ヤバいセリフだ。

まぁ平塚先生相手にどうこうなる気も可能性もないので、あっさりとインナーを脱ぎ捨て床にうつぶせになる。

普通、ダンジョンに潜ることで冒険者は経験値を得て強くなる。主神によって刻まれたそのステイタスを更新してもらうことで能力値やレベルが上がり、強くなっていく。ステイタスの更新は、冒険者らにとって強くなるための必須行為なのだ。

それが普通で、当たり前。

「ふむふむふむ、なるほどな。」
平塚先生が俺の背中をなぞる。ちょっとくすぐったい。
「つか平塚先生、別に指で触る必要ないと思うんですけど。」
「ほぉ、なるほどな。」
俺の抗議虚しく平塚先生の指が背中を這う。ちょっと?別に俺のサービスシーンとか需要ないでしょ?
「ん、もう服を着ていいぞ。」
【神聖文字(ヒエログリフ)】で刻まれた【神の恩恵】は常人には普通読めないが、読めない人がいないというわけでもない。平塚先生はそんな後者の1人だ。
「ほれ、君のステイタスだ。」
平塚先生が隣に置いてあった羊皮紙にコイネーで俺のステイタスを翻訳して書いて

くれる。

「相変わらずのおもしろステイタスだよ。もしかしたら、君が一番のイレギュラーなのかもしれんな。」

苦笑している平塚先生に礼をいい羊皮紙を受け取る。レベルはやはり4。雪ノ下たちに言った時は確証がなかったが、どうやらあっていたようだ。

どうも俺は、ちょっとばかし普通ではない、らしい。普通冒険者は主神によってのステイタス更新を行うが、俺の場合は少し違う。

羊皮紙の下、《スキル》欄に書かれたユニークスキル。俺が初めから持っていたらしいヘンテコスキルだ。

そのスキルの名は、《自由放任（レッセーフェール）》。

ステイタスの自動更新スキルである。

俺は自分の主神を知らない。そもそも主神がいるのかすらわからない。【神の恩恵】自体はあるし、ステイタスも更新されるので不便はないが。

主神もいないため俺にはファミリアもない。ホームもない。あっても電波が届かない。

オラこんな状況イヤだ、とは思うが、どうにもならんし、しようとも思わない。

どうも平塚先生は何か知っているみたいではあるが、教えてくれそうもないのだ。早々に諦めはついている。

その昔、俺と妹の小町は親を亡くし、路頭に迷っていた。そんなところを冒険者で

あった平塚先生に助けて貰ったのが出会いである。

あの頃からもうかれこれ１０年くらいの付き合いになる。俺は小町のための金を稼ぐため、日夜ダンジョンに潜り続けた。その頃から平塚先生に技術を教えこまれてきたため、俺は「先生」と読んでいる。先生は「師匠」とかが良かったらしいが。

まぁその後色々あって冒険者を辞め、バベル職員となったのだが。小町も物心ついたころから住み込みのバイトを始めており、２人して稼いだおかげで現在は夢のマイホーム生活。マイホームって本当素晴らしい。頑張って良かった。庭や白いブランコは付いていないが、中々の家を買うことができて小町も満足している。

「俺を変な奴扱いしないでくださいよ。」

そう言って貰った羊皮紙に一通り目を通し胸ポケットにしまう。

「実際、その数値は変な奴だよ。ギルドには報告できないな。」

「ファミリアがない時点で、報告もなにもないでしょう。」

普通冒険者は自らの所属しているファミリアやレベル等をギルドに報告する義務がある。だが俺はファミリアもないし主神もわからないため、報告しようがないのだ。神や公共施設であるギルドからも見放される俺マジぼっち界のエリート戦士。

「攻撃魔法が発現しないのが勿体無いことこの上ないよ。」

「変装・隠蔽があるだけ十分ですよ。」

「君が攻撃魔法を持てば、最強の一角にもなれると思うがね。」

「確かに、勿体無いとは思いますけど。それはちょっと過大評価ですよ。隠蔽魔法があ

るだけでかなり満足してますしね。」

雪ノ下には明かさなかった俺のステイタスの異常性。雪ノ下が気付いていた違和感。

「２４時間以上魔法を使用できる冒険者は、最強だと思うがね。」

それは、自身や武器防具に対しての隠蔽魔法の常時使用。俺の異常性の１つ。

先ほど受け取った俺の基本アビリティは敏捷、器用が高めのＤ、力と耐久が低くＦとＨ。そして

「魔力値測定不能。相変わらず、化物じみた魔力量をしているよ。」

おそらく魔力量だけで考えてみれば、俺はオラリオ最強のギルド職員なのである。

由比ヶ浜結衣は困っている。②

魔力。

【神の恩恵】によって得られる基礎ステイタスの中で唯一ハッキリとした概念のないステイタス。

力とは即ち膂力の高さ。

耐久とは即ち身体の強固さ。

器用とは即ち技術の巧みさ。

敏捷とは即ち速度の速さ。

では一体魔力とは。

超常現象を引き起こし、モンスターとの戦闘において一撃で戦況を覆すほどの力を秘めるとされる攻撃魔法。

傷を瞬時に癒すことのできる回復魔法やその他の補助魔法。

魔力とは魔法を行使する上で無くてはならないものであり、また魔力が上昇すると魔法の威力や効果も高まるとされている。

また魔法は行使し続けることにより、体力とは対になる精神力を消費するため、精神疲労という昏睡状態を引き起こすこともある。

つまり。

魔力とは『精神』の強さだ。サンデー風に言うなら心の力。バオウとか出せる魔法が欲しいです。

俺が初めて自分のステイタスを見せてもらった時から、俺の魔力値は測定不能を示していた。

俺の第一スキル《自由放任》と並ぶ、俺が異常とされる二つ目の要因である。小町曰く、三つ目は俺の腐った目らしいが。

《自由放任》について平塚先生は何やら知っている風だったが、初めて俺のステイタスを見た時は少なからず驚いていた。どうやら測定不能と出るのは前代未聞なようだ。

ダンジョンに潜るようになって割とすぐに俺の一つ目の魔法、《フラグ・プリース》が発現した。攻撃魔法じゃなかったのことには少しばかりガッカリしたが、今ではかなりこの魔法にお世話になっている部分が多い。

やろうと思えば女湯を覗くことだって可能である。やらないし、やったこともないが。理由は簡単。冒険者連中の中には鋭い奴も多いし何よりスキルや何やらで見破られる可能性もある。これ以上人生詰んでたまるか。

椅子にかけておいた上着を着て腰を下ろす。

「そういえば平塚先生」

「ん？」

「雪ノ下も平塚先生の教え子なんですか？」

バベル４０階で初めて出会った時、確か雪ノ下も平塚先生に色々教えてもらったと言っていたはずだ。

俺と面識がなかったことから、俺と小町が２人暮らしを初めた後に平塚先生と出会ったのだろう。

「ああ、雪ノ下か。……出会ったのはちょうど君たちがここを出ていった後になるかな。」

飲んでいた酒の瓶を置き、平塚先生が俺の予想通りの事を告げる。

「気になるか？」

「いや別に。それに人のいない所で話を聞くのもどうかと思いますし。」

「ま、そうだな。力づくで聞き出すがいいさ。」

「いや暴力沙汰は勘弁なんで。」

一方的な暴力を受ける未来しか見えない。俺の魔法とか小細工とか通用しなさそうだもんあいつ。

「私としては、方針の違いから起こる同門内の派閥争いとかがいいんだがな。」

「そんな音楽グループみたいな理由で死にたくないですよ。」

嬉々としてそう呟く平塚先生。

ホントこの人燃える展開ってのが好きだよな。俺も好きになっちゃいそう。何がとは言ってない。

そろそろいい時間、ということで帰り仕度を済ます。平塚先生は送ると言ってくれたがそれは丁重にお断りした。

なーんかこの人、俺の事を子供扱いしすぎなんだよな。かあちゃんみたいだけどさ。

「じゃ、今日はありがとうございました。また何かあったら報告します。当分先であることを祈りますが。」

むしろ何かあっても言わないまである。追調査とか最悪だ。

「ああ、どんな些細な事でも報告するんだぞ？」

そう言ってぱちこーん☆とウインクをする平塚先生。何故か平塚先生相手の嘘は良くバレる。

「その歳でウインクってちょっとイタ「ほぅ？」何でもございません。」

おーこわ。モンスターすら拳で粉砕すると噂の平塚先生の鉄拳は本当に痛い。てか拳て。『漢』って多分こんな感じなんだろうな。

「比企谷、明日は中層だったな。」

「え、ああ、多分そうなるかと。若干心配ですがね。」

「あぁ、そうだ。だから、ちゃんと男のお前が守ってやってくれ。」

平塚先生が顔つきを変えて俺の瞳を覗き込む。

いつになく真面目な平塚先生の纏うその雰囲気は、まるで近いうちに何かが起こることを暗示しているようで、かっこいいが、少し怖いとさえ思ってしまった。

月が雲に隠れ、辺りを闇が覆う。

「……上司命令なら、仕方ないっすね。」

『それは一体、誰のことを言っているんですか?』という質問を喉の手前で飲み込み、そう答える。職務時間外でも立場をわきまえる俺マジ社畜の鑑。普通に社会人の常識だった。

「期待しているぞ。」

俺の返答に満足したのか、雰囲気が和らぐ。春の夜風が俺たちの間を通り抜け、冷たくも生暖かい空気で満たされる。

「過度な期待は毒ですよ。」

「適切な期待さ。君なら大丈夫だよ。」

途端、優しげな瞳で俺を見つめる平塚先生。女神と峻別がつけられない程の慈愛に満ちた穏やかな表情。

え、ギャップ萌え狙いですか？ヤバいヤバい、持病の不整脈が。

「……うす。」

結局照れ臭くなって尻すぼみ気味にそう答える俺。ほんと、何でこの人まだ独身貴族やってるの？うっかり貰いそうになっちゃうだろうが。

路地裏から大通りへ抜ける。結構いい時間ではあるものの、大通りから溢れ出る活気と喧騒は未だ止む気配がない。

小町も既に家に帰ってきていることだろう。今日は早上がりだったはずだ。

平塚先生と別れ、今俺はマイホームへ絶賛帰宅中だ。この時間が1番熱心に仕事をしていると自信を持って言える。家に帰るまでが仕事だ。なぜなら帰宅中も労災がおりるから。

眠たい頭でそんな眠たい事を考えながらマイホームへ。中央広場から北北西、北西のメインストリート、通称『冒険者通り』から離れたここは、静かで落ち着いたいい場所だ。

小町の希望でつくられた我が家は白塗りの二階建て。耐震に気を使いそれなりに高い家を買った。ローンはとっくの昔に支払済である。

「ただいま」

「おかえりー」

玄関で靴を脱ぎリビングへ行くとソファで妹の小町がとろけていた。２つ下のこの地に舞い降りた天使、それが小町である。贔屓目が無いと言えば嘘だろうが、かなりの美少女だと自信を持って兄ちゃんは言える。俺に似なくて良かった、マジで。

愛らしい瞳、人懐こい表情。小さく記者な体躯、元気な町娘といった風の女の子。何より凄いのが、リア充とぼっちを兼ねることができるというところ。次世代型ハイブリッドぼっちとはこのことを言うのだろう。白いモビルスーツばりに高性能かつ革新的である。

「おにいちゃん今日はちょっと遅かったねー。平塚先生のとこ？」

「おう。夕飯は食べてきた。コーヒー、お前も飲むか？」

「んーちょうだーい。」

ソファの上で由比ヶ浜とかその辺が読み耽ってそうな雑誌をペラペラしている小町。ああいう雑誌の占いコーナー、一体誰が書いてるんだろうか。全く当たらないんだが。

２人分のマグを取り出しコーヒーを淹れる。家のコーヒーメーカーは旧式モデルだ。結構古いやつをセールで買った。全然使えるしそれなりに美味い味も出るのでいいかと思っていたが、この間ギルドに導入された最新式の使い心地を味わうと買い換えたくなってくる。今度小町に言ってみようか。でも次の新型が出るまで我慢した方がいいのかもしれない。こういった器具ってどのタイミングで購入するのがベストなのかわからねぇんだよなぁ。買い物下手などうも俺です。

コーヒーを淹れリビングへ。ミルクとシュガーのポットを持ってホワイトコーヒーをつくって啜る。

「あぁ……働きたくねぇ……。」

心の奥までホワイトに染まる。これを家で飲んでしまうと２度と家から出たくなくなってしまうのが問題だ。早く寿退社で養われたい。

「ん、ありがとおにいちゃん。」
「おう。」

小町がソファから身を起こして正面に座る。小町の機嫌は……普通、かな。良くもなく悪くもない感じだ。

「なぁ小町」
「なに？」
「部署移動でな、仕事でダンジョン行くことになったんだわ。」
「え？仕事で？ギルド職員なのに？ダンジョン行くの？」
「まぁ色々あってな。ダンジョンの調査だとよ。」
「……ふーん、そっか。気をつけてね。」
「え？それだけ？」

あっさりとした小町の塩対応に少し動揺する。もうちょっと何かあるかと思ったのに。

「だって、お兄ちゃんが嫌いな『仕事』でもっと嫌いな『ダンジョン』に行くってことは、何かあるんでしょ？だったら仕方ないよ。小町はお兄ちゃんの意思を尊重するからね。あ、今の小町的にポイント高い♪」

「だから何ポイントなのそれ？貯めたら皿でも貰えるの？」

小町の言葉にそんな風に答えるものの、内心感激である。なんてできた妹なんだろうか。絶対誰にも渡さん。

「でも本当に気をつけてよね。１人じゃ何かと困ることも多いだろうし。」

「ん？いや１人じゃないぞ。もう１人…いや２人か。１人は臨時だがな。」

小町の不安を払拭するようにそう言う。由比ヶ浜はともかく雪ノ下とは同じ部署の上司と部下の関係だ。ダンジョンに潜る時は恐らく２人っきりだろう。ドキドキしちゃうね！モンスターの方がマシかもしれん。

「え……うそ……」

小町がマドラーを机に落とし、唖然とした表情をみせる。え？いや何その反応？ダンジョンに潜るよりも俺が誰かと潜ることの方がびっくりなの？

「い、いや本当だけど。」

「あの万年ぼっちのごみいちゃんが……誰かとダンジョンに潜るなんて……。」

「ちょっと？失礼すぎない？」

てかごみいちゃんて。幻聴だよな？そうだよな？

「……その2人って、どんな人なの？」

心なしかボリュームを絞った声で小町が聞いてくる。ちょっと小町ちゃん？そんな意外なの？俺も意外だと思ってるしもうダメだ。

「どんなって……アホのビッチと氷みたいな女、だな。」

アホのビッチと氷女。そこに万年ぼっちと。カオスなメンバーだな。俺がメンバー

に入れてもらえているのか不安が残るが。

「お兄ちゃん!!!」

ガタっ、と音を立てて小町が立ち上がる。

「てことはそれって女の人とダンジョンに行くってことだよね！小町的に超ポイント高いよ!!高すぎだよ!!」

興奮した面持ちの小町。顔に手を当ててキャーキャー言っておられる。

「これで念願のお義姉ちゃんができるー!!どんどんダンジョンに潜ってねお兄ちゃん！」

「おい俺への心配はどこにいった。あとギルドがダンジョン調べてるのは他言無用らしいからな。」

「おっけーおっけー誰にも言わないよん♪」
小町は何がそんなに嬉しいのか鼻歌を歌いながらマグを片付けている。

いつもの日常、平和な日常。
1日の疲れを癒してくれるマイホーム。主神もファミリアもない俺だが、妹さえいればいい。

「明日もダンジョンだから、早めに寝るわ。おやすみ。」
「うん！おやすみ～。」

明日からは中層だ。疲れを残すわけにはいかない。ダンジョンは何が起こるかわからない。本当、何も起こらなければいいんだがな。こういう時の何か起こる感は異常。

翌朝、小町と連れ立って西のメインストリートを歩く。早朝ではあるものの、冒険者の姿は多い。雪ノ下たちとの待ち合わせはバベル西口。小町もバイトがあるが、俺とダンジョンに潜る人物を見たいというので付いてきている。

「にゃにゃ？小町じゃにゃいかにゃ？あ、おはようございますにゃ。」

もうそろそろ西口、というところで横から不意に声をかけられる。俺ではなく小町が。

茶髪のショートから飛び出した2つの猫耳。猫人族だ。若草色と純白のエプロンドレスにヘッドドレスの少女。

「あれ、アーニャさんじゃないですか。おはようございますです！今日は早いんですね～。」

彼女は小町のバイト先、【豊穣の女主人】の店員の一人だ。アーニャという名前らしい。ロシア人ではなさそうだ。

西のメインストリートの中でも一際大きな酒場、それが【豊穣の女主人】。特徴的な制服は可愛らしさと品が見事に調和している。オラリオ内でも1、2を争う人気店だ。店長のミアさんは豪胆な人であり、素行の悪い冒険者共を上手く扱っているらしい。

店長のミアさんと平塚先生が知り合いということもあり、昔は良く来ていたものだ。勿論、姿は魔法で隠してだが。それでも何度か通う内に店員の数人やミアさんには見抜かれてしまっている。てか多分ミアさんは最初からわかってたっぽいし。何者なんだよあの人。本当に女性なの？

婚活に失敗した平塚先生を慰める時は大抵ここに来る。理由は飯の量が多いから。腹に物が溜まると、人間気が緩んで眠くなるものだ。正直平塚先生を慰めるのは面倒臭いのでとっとと潰れて欲しいのである。

で、さっき声をかけてきたのは【豊穣の女主人】の店員の1人だ。何度か見たことがある。

俺も一応おはようございます、と一言だけ挨拶を交わす。や、あれだからね？挨拶大事だから。多分俺に対しての挨拶じゃないだろうけど。

「朝から男と２人でお出かけとは、小町も中々やるにゃね～。」
「もうやだなぁアーニャさんったら。只のごみぃちゃんですよぉ。」
「ちょっと小町？その紹介の仕方ひどくない？」
「にゃにゃ？小町のお兄さんにゃ？それにしてはあんまり似てないにゃね。」

そりゃそうだ。変装してるし、まぁわからんだろう。

「それで、アーニャさん。今日は何かあるんですか？こんな朝早くから。」
「にゃーにを言ってるのにゃ。今日はロキ・ファミリアの帰征祝いの日だって、小町も昨日ミア母さんから言われてたにゃよ。忘れてたのかにゃ？」
「あーっ！そうだった……。浮かれてて忘れてた……。」

どうやら小町はここで離脱のようだ。ロキ・ファミリアの予約があるのなら、仕込みが大変なのだろう。

「うぅ……おにいちゃぁん……。」

「諦めろ小町。ちょっと可愛い声を出しても俺にはどうにもできん。」

ミアさんも怖いし。どこで耳に入るかわからんから口には出さんが。こうなったら俺にできることはない。

「うぅ～～～。小町的にポイント低いよ～～～。」

だから何のポイントなんだそれは。

「さ、小町も仕事にゃ！今日も1日頑張るにゃよ～！」

そう言ってズルズルと小町を引きずっていく猫人族の店員。

心の中で手を合わせながら小町を見送る。許せ小町。

オラリオでも人気の名店だ。やはりそれなりに忙しいのだろう。今店から出てきた灰髪のヒューマンの店員も、夜の客確保に余念がないようだ。

「あの、これ、落としましたよ。」

なるほど、ああやって声をかけるのか。怖え。魔石の新しい使い方を学んだわ。使うタイミングまったくなさそうだが。

「ってあいつは……。」

声をかけられているのは昨日ミノタウロスから逃げ回っていたあの白髪ルーキー。割と元気そうで何よりだ。

知らない顔ではなかったため、つい足を止めて見てしまう。二言三言会話し、どこから取り出したのだろうか、手のひらサイズの包みを少年に渡す少女。

なんだあれ、弁当か？おいおいボク、知らない人から物をもらっちゃいけないんだぜ？裏があるんだから。ちなみに俺は貰ったことがない。注意力云々の前に機会がない。

案の定、白髪の少年はアッサリ陥落。今晩の客の1人が確定した瞬間だった。チョロいように思えるかもしれないが、残念、男ってのはそういう生き物なんだよなぁ。

それにあの少年が純朴であることを考えても、あの灰髪の店員の手腕は見事な物だ。ビッチというよりあざと可愛いといったところだろうか。ギルドの後輩を思い出すようなあざとさだ。

（がんばれよ、少年。色々と。）

心の中でエールを送り、俺は豊穣の女主人を後にした。